

資料

(平成二十二年十二月)

第五十五回「合宿教室」(阿蘇) 感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

第五十五回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成二十二年八月二十日（金）から二十三日（月）まで三泊四日間
 ところ 熊本県阿蘇市「国立阿蘇青少年交流の家」
 参加総数 一五一名

目次

“はしがき” に代へて	……………	理事長 上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	……………		4
“合宿教室” 55年の歩み	……………		5
“合宿教室” の日程表（三泊四日）	……………		7
第55回 “合宿教室” のあらまし	……………		8
走り書きの “感想文” と第二回目の “短歌詠草”	……………	参加者全員	25
合宿中に創作された「短歌詠草」	……………	参加者全員	77
あとがき	……………		94
カメラ・レポート22枚（27ページから69ページの左頁に掲載）	……………		

“はしがき”に代へて

（旧国民文化研究会理事長（東海ゴム工業顧問））

上 村 和 男

昭和三十一年（一九五六年）八月、鹿児島県・霧島で第一回「合宿教室」が開催されて以降毎年欠かさずに開催して今年で第五十五回になります。

今夏は「日本に学ぼう」との合ひ言葉のもと、熊本県阿蘇市の「国立青年の家」で三泊四日の日程で開かれました。阿蘇の地で開催するのは今回で二十回になります。

世界一とも言はれる広大な外輪山に囲まれた自然豊かな合宿地は、日本の国原の只中にある感じの場所でした。例年になく厳しく暑い日々でしたが、その暑さにも負けず、講師をはじめ参加者一同の「国を思ふ心」がひしひしと伝はってくる充実した「合宿教室」でありました。

折しも「政権交代」があり、民主党政権が誕生して一年にならうとしてゐますが、今日に至るもまだ「国家目標」を明示することなく「マニフェスト」によるバラ撒き政策を続行してゐます。

さらに「政治主導」と云つて、国家組織の中核である官僚を排除し、自らが主体となつて国家行政を遂行しようとしてゐますが、それでは継続的な事項や経験の積み重ねの多い行政を円滑に遂行することができません。その証拠に、米軍再編に絡む普天間基地移転問題は解決の目途が立たず、日米同盟の基盤を不安な状態にしてゐます。中国の軍拡路線が顕著な中で、民主党政権では国の存立を危くし、国の衰退を早めようとしてゐるとしか思はれず心配でなりません。

今回、講師としてお招きした京都大学大学院人間環境学専攻教授で本会の顧問であります中西輝政先生は、「この国はどこへ行くのか」との演題で、次のやうに語られました。

「日本の経済は、世界第二位から第三位か五位へ落ちて行くかも知れない。かういふ大事な時期に政治はフル回転して国の危機を救はなければいけないのに、政権党は代表選に一所懸命で、党利党略が中心となり本来の政治がストップしてしまつてゐる」と民主党政権の在り方を大変憂へ、日本の衰亡が止まらない状況を語られると共に、「皇室を中心とする国のあり方を正しく理

「解する『新しい日本人』こそが、この困難な状況を切り開いていく」とも云はれ、若い世代が日本の伝統に一体感を覚えるやうになって欲しいと説かれました。そして質疑応答を含めて四時間もの熱のこもったご講義でありました。

戦後の日教組教育による一面的な民主主義教育を受けたはずの参加者である大学生や青年諸君が、合宿教室の最終日に行はれた全体感想自由発表において次のやうな感想を述べてます。

「天皇や皇室は歴史的権威だけでなく、天皇が詠まれた和歌を通じてお一人一人の人間性が素晴らしいことを感じる事ができた」とか「先人の思ひに心を馳せる、とか自分が日本人の一人としてどう考へるか、といふやうなことを経験してなかったの自分自身の心境が随分変はった」「天皇の民を慈しむ御心が歴史の具体的なエピソードを通して感じられた」等々、自分の感じた事を素直に発表してくれました。

この様な感想を聞くことが出来たことは中西先生を初め、会員講師によって具体的に説かれた日本文化のすばらしさが、参加者一同の心に沁み入った成果であり、主催者としては何よりも嬉しく有難く思った次第です。

なほ、ここに編集した「感想文集」は全参加者が「合宿教室閉会解散の間際」に走り書きしてくださったものです。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかつたことにご容赦いただきたく存じます。また、この文集には十余名の方々（編集後記に記載）が勤務の余暇を割いて取組んで下さいました。心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、この「合宿教室」事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難いご支援の数々に對しまして、会員一同に代はり、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成二十三年）の「第五十六回合宿教室」は八月十九日（金）～二十二日（月）の三泊四日間、広島県「国立江田島青少年交流の家」で開催されます。招聘講師は東京大学名誉教授 小堀桂一郎先生（本会顧問）です。詳細の合宿案内パンフレットは来年三月ごろから配布予定です。

何卒、多数の皆様のご参加をお待ちしております。



第 55 回全国学生青年合宿教室（平成 22 年 8 月 20 日～ 23 日） 於「国立阿蘇青少年交流の家」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

北海道大学 1 埼玉大学 1 東京大学 1 東京理科大学 1

学習院大学 1 国学院大学 1 日本大学 1 亜細亜大学 1

中央大学 2 杏林大学 1 専修大学 1 都留文科大学 1

職業能力開発総合大学校 1 同志社大学 1 立命館大学 1

岡山理科大学 1 九州工業大学 5 九州女子大学 3

福岡大学 4 福岡工業大学 1 筑紫女学園大学 1

九州大学 1 中村学園大学 3 久留米工業大学 1 佐賀大学 1

東海大学 1 長崎大学 1 琉球大学 1

計 四十名（うち女子十三名）

（社会人参加者） 三十九名（うち女子五名）

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 六十二名

（事務局・アルバイト） 四名

（見学者・慰霊祭協力） 五名

総計 一五一名

— “合宿教室” 55年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギヤルポ・占部賢志
55	〃 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
累計・参加人員			14, 159名	

財団法人国民文化研究会・大学教育有志協議会 主催
 第55回(平成22年)全国学生青年“合宿教室”日程表(阿蘇)

8月20日(金)	8月21日(土)	8月22日(日)	8月23日(月)
	起床・洗面	起床・洗面	(06:30) 起床・洗面
	(06:40)	(06:40)	掃除
	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食	朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食	(07:15) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 朝食
	(08:30) 短歌創作導入講義 元富山県立意山高等学校教諭 岸本 弘 先生	(08:30) 講義 「歴史の玉の緒」 国立病院機構都城病院長 小柳 左門 先生	(08:30) 講義 「持続する志」 佛寺子屋モデル 山口 秀範 先生
	(09:30)	(10:00)	班別研修
	野外研修 昼食	班別研修	(10:00) 地区別懇談
	阿蘇火口登山 草千里散策 第一回短歌創作	(12:00)	(10:30) 合宿運営委員長所感 (10:45) 全体感想自由発表
受付: 13:00 開始 開会式: 14:30 開始		(13:00) 会員発表 イノケヨカリカズミツト 伊藤 俊介 氏	(11:45) 感想文執筆 第二回短歌創作
(14:30) 開会式 (挨拶) 国民文化研究会理事長 上村和男 氏 オリエンテーション 合宿趣旨説明及び諸注意伝達 合宿指導班長 小林 晋平 氏 合宿運営委員長 古川 広治 氏	(13:30) 休憩	(13:30) 創作短歌全体批評 東洋紡績商 庭本 秀一郎 先生	(12:45) 閉会式 国民文化研究会副理事長 磯貝 保博 氏 (13:15) 開会式: 13:15 終了 (昼食・解散)
(15:15) 班別 自己紹介	(14:00) 講義 「この国はどこへ行くのか」 京都大学大学院人間環境学研究所教授 中西 輝政 先生	(14:30) 班別短歌相互批評	
(15:45) 合宿導入講義 「古典輪読に学ぶ日本人の知恵」 日章工業㈱ 藤新 成信 先生	(15:30) 質疑応答 (写真撮影)	(17:30) (短歌再提出)	
(17:00) 班別研修	(16:00) 班別研修		
(18:00) 夕食 入浴 休憩	(17:30) (短歌提出)	夕食 入浴 休憩	
(20:00) 歴史講義 「元寇 文永の役の実像―鎌倉時代を振り返る―」 元福岡県立三池高等学校教諭 志賀 健一郎 先生	(18:00) 班別研修	(19:00) 慰霊祭の説明 元新潟工科大学教授 大岡 弘 先生 (19:30) 慰霊祭	
(21:30) 班別研修	(19:30) 古典講義 「柿本人麻呂」 昭和音楽大学名誉教授 國武 忠彦 先生	(20:15) (移動) (20:30) 班別 懇談会	
(22:30) 就寝	(21:00) 班別研修	(21:15) (移動)	
(23:00) 消灯	(22:30) 就寝	(23:00) 夜の集ひ	
	(23:00) 消灯	消灯	

第五十五回 “合宿教室” のあらまし

第一日目

(八月二十日・金曜日)

第五十五回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇市の「国立阿蘇青少年交流の家」にて開催された。当施設は、阿蘇五岳の一つである中岳を眼前に臨む場所に位置し、周囲を青々とした芝生に囲まれた高原にある。朝夕には隣接する牧場の牛の憩ふ様も間近に見え、また酷暑の最中にも高原のそよ風を得て涼を感じることに出来る素晴らしいロケーションである。

全国から集ひ来た参加者はそれぞれの思ひを胸に、受付を済ませ速やかに開会式へ臨み、三泊四日の合宿教室が幕を開けた。

開会式

九州工業大学大学院一年伊藤健司君の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して上村和男理事長は「これからの人生をどう生きていくべきかを考へる三泊四日にして欲しい。先人が伝へてきた国の歴史を頭で考へるだけでなく、国柄の大切さを各自が自分の心で感じ取るべく努めて貰ひたい。われわれ一人一人が、日本の国を守るといふ意思と志を持たない限り、国の存続は危ふくなる。学問の目的をしつかり踏まへて取り組んで欲しい」と挨拶した。次いで日本大学二年小柳辰介君は「初めて参加した昨夏、班の友と語る中で日本の良さを実感した。日本人として如何に生きていくべきなのかといふことを共に学び語り合ってい

きませう」と合宿への決意を述べた。

合宿導入講義 「古典輪読に学ぶ日本人の知恵」

日章工業(株)代表取締役 藤 新 成 信 先生



輪読に学ぶとは、「心を働かせて学ぶことであって、字句の意味が正しいとか知識を身につけるといふことではない」と先づ説かれた。そして古典を読む理由について「学問の目的は人生をどう生きるかを考へることにある。一人でやってみてもなかなか難しく、自分の身に降りかかる事態をどう解きほぐし対処したらいいのか。そんな時先人の言葉は一つの姿を示してくれる。その言葉にどう接するかが大事なのである」と述べ、一つの文章を皆で精読して感想を述べ合ひ、その言葉に耳を傾け合ふ輪読の重要性を説かれた。

聖徳太子『維摩経義疏』の「若し自他の二境を存して修行せば、即ち修する所廣からずして…」に触れて、現実問題の多くは自己に囚はれた物の考へ方に萌してをり、「自他の関係」を深く考へ「他と連なりつつ生きてある自己」を凝視することの大切さ（小田村寅二郎先生の御指摘）を輪読の経験から学んだと語られた。さらに獄中の吉田松陰が同囚の人達と人の道を求めて研鑽したことを『講孟笱記』を引いて紹介され、会社経営者としては「いま不況によって人が育ち、成長させていただいてゐる」と日頃の思ひを披歴された。

最後に、「人の話を親身になって聞き、心の底からの思ひを語り合ふ四日間として頂きたい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ、講義を聴いて班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて話し合ひ、講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、そのうへで各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせみか、初めのうち

は意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時に反論し時に共感し合ひながら、班員相互の交流が深められていった。

講義 「元寇 文永の役の実像―蒙古襲来絵詞を読む―」

元福岡県立小郡高校長 志賀 建一郎 先生



文永の役に関する通説を覆す新たな研究が発表されてゐることに触れながら講義を始められた。「九州熊本の御家人であつた竹崎季長は、後世『竹崎季長絵詞』とも呼ばれる絵と文からなる合戦記『蒙古襲来絵詞』を描かせた。褒賞を得るといふ現実的要求のため、その記述には「証人を立てて」、「証人を立つ」といふ文言が多用されてゐる。このことがこの絵詞の真实性を裏付けてゐる」。次いで高校日本史教科書の記述を引きつつ、文永の役に関する従来の説の誤りを指摘された（元軍の集団戦法に対して日本軍も集団戦法で戦つた、日本軍は苦戦などしてゐない、暴風雨は吹かなかつた、等々）。

「絵詞を読めば往時の日本人の強さ、素晴らしさが分るはず」と、絵詞の一節を参加者全員で声を揃へて朗読した。そして「なぜ日本の教科書は『日本は元の大軍を打ち破つた』と書かないのか」、日本が勝つたとストリートに書くことを躊躇させるものは何かと問はれ、極東国際軍事裁判（いはゆる東京裁判）の呪縛からなほ逃れられないため、歴史を受け継がうとするよりも距離を置くことを良しとするやうになつてゐると今のわが国が内包する本質的な問題を指摘された。

第二日目

（八月二十一日・土曜日）

早朝六時半、合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。参加者は、講堂の裏手に広がる芝生の丘に集ひ、眼前に阿蘇中岳の雄々

しき姿を仰ぎ、遠く眼下には阿蘇外輪山に囲まれた広大なカルデラを望みつつ、高原の清々しい朝の空気を吸い一日の始まりを迎へた。司会の(株)寺子屋モデル横畑雄基氏の提案で、参加者一同目をつむり耳を澄ませて遠く近くに聞こえる音に大自然を感じる取り組みも行はれた。日々都会の喧騒に囲まれることの多い参加者には、あらためて自然の営みに思ひを馳せ、心洗はれる体験となった。北九州市立医療センター森田仁氏により唱歌、この日は『元寇』の、合宿三日目は『牧場の朝』の紹介、指導があり、全員で合唱した。

短歌創作導入講義 『短歌のすすめ』を読む』

元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘 先生



最初に夜久正雄・山田輝彦両先生の共著『短歌のすすめ』『短歌のあゆみ』(国文研叢書)が上梓された時代背景が説明された。その中で昭和三十七年の第七回合宿教室で行はれた夜久先生による『短歌の哲学と技術』と題する短歌創作についての講義の一節が紹介された。そして「短歌創作の意味は、聖徳太子の『自他の二境を分かつ』とのお言葉から読み取られる平等感であり、それは心の通ひ合ひを大切にしてきた祖先伝来の日本文化の本質そのものである」と説かれた。

また当時長崎大学の学生だった澤部寿孫さん(本会副理事長、元日商岩井)が昭和三十七年の阿蘇合宿教室と翌昭和三十八年の大村地区小合宿で創作した歌を紹介されて、ありのままのものを見て感動したことを詠まうと心懸けることで、一年足らずで別人の如くに洗練されたものとなったことを実例で示された。

そして柿本人麻呂、防人、幕末の志士、そして明治天皇・大正天皇・昭和天皇のお歌を紹介され、歌の永続性を説く中で、短歌創作の心得が説かれた。

参加者はそれぞれ弁当とお茶を手に四台のバスに分乗し、地元熊本在住の国民文化研究会会員のバスガイドの説明を聞きつつ登山口へ向かった。そこからは班別の自由行動で、ある班は徒歩にて、他はロープウェイにて火口まで登った。火口は白い噴煙を上げ、煙の合間に見える湖は碧く、美しさに息を呑む思ひであった。

講義 「この国はどこへ行くのか」

京都大学大学院教授 中西輝政 先生



初めに「現在の日本は、政治の混乱とも相俟って、経済・教育・安全保障などが心もとない状況に陥つてをり、欧米のマスメディアは米中に続く『ジャパンアズナンバー3』と評してゐる。その立て直しにこれから日本人がどう関つていくべきか」と参加者に問はれ、三つの柱を立てて講義を進められた。

まづ一点目に、現在の日本を荒廃させてゐる原因として、逼迫する財政への無策、年々増大する中国の軍拡とその経済力に対する米国の弱腰、かうした米中の動向に対処し切れないわが政府の対応、そこから生じた日米同盟関係の亀裂等々を指摘され、さらに民主党政権の国柄への無理解無頓着にも注意すべきと警鐘を鳴らされた。それでは二点目にこのやうな衰亡する日本を救ふ方策は何か。「国のあり方をしっかりと踏まへた上で現実問題解決の戦略を練る『新しい日本人』の登場が待たれる。それは吉田松陰の精神、松下村塾の戦略学に学ぶことである。日本といふ国のあり方とそれを支へる精神が一つになったとき、日本は立ち上がることができる」「現在の国難を救ふ日本人に必要なことは、わが国のアイデンティティーを身に帶し皇室のあり方を真剣に考へながら、政治の現実を切り込んでいく勇気を持つことである」

と述べられた。そして三点目として、「日本精神と戦略の思想とを合はせ持った救国者」に求められるものは「日本へプレッシャーをかけてくる諸外国との関係においては日本の歴史と文明をひもときながら軍事問題を考へる戦略の思想であり、これから様々の動きが予想される政局においては政党政派を超えて日本再生といふ保守の旗をしっかりと掲げることである」と説かれ、脅威を与へる国に関する情報を確実に集めることの重要性も強調された。

講義後の質疑応答の中で、戦後のわが国は、「軍事力の問題」「インテリジェンスの重要性」「国際金融の問題」についてはきちんと学ぶ環境にないことなどを指摘された。

講義 「柿本人麻呂」

昭和音楽大学名誉教授 國 武 忠 彦 先生



冒頭、大化の改新（六四五）の二十余年前に亡くなった聖徳太子の御存在に注意を促され、「天皇弑逆といふ暗澹たる時代に国政を担はれた太子が定めた憲法十七条は今にいたる日本憲法の原点である」

「そして太子の志は舒明天皇に引継がれ、さらにその御子中大兄皇子（天智天皇）、大海人皇子（天武天皇）に伝へられた」と述べられた。太子が願ったものは一日も早い中央集権国家の樹立、そのための公地公民制の実現、門閥打破による人材登用であった。「これらはこのお二人によってほぼ完成されるが、天武天皇の後に即位されるのが柿本人麻呂が仕へた持統天皇である」と説かれた。

天武天皇と持統天皇の間にお生れになった草壁皇子（皇太子）は父天武天皇崩御の喪明け間もなくして二十八歳で薨去、その御子軽皇子はまだ五歳であった。そこで軽皇子が大きくなるまでの中継ぎをされたのが持統天皇であった。「持統天皇の胸中はいかばかりか。この天皇に人麻呂がお仕へしたといふ事実を頭に留めて欲しい。七一〇年の平城京遷都以後を奈良時代と呼ぶが、それに先立つ七十年間も見落してはならない。この歴史の連続性の中で私達の現在の礎ができたことを忘れてはならない」と述

べられた。

続けて人麻呂が天智天皇の近江京の「荒れたる」様子を詠んだ長歌について、「橿原の御代（初代の神武天皇）から詠み始めて天智天皇に至る歴史が想起されてゐるが、何を意味してゐるのか。人麻呂は皇位がずうつと継承されてきた国の姿を偲んでゐるやうだ」と述べられ、通常は意味を問はない数々の枕詞、神々と人々が表裏するかの如き妙なる調べを味はひつつ、人麻呂の歌謡が内包する歴史精神とでも呼ぶべきものを明らかにされた。

最後に小林秀雄先生の「過去は今私の中にある」といふ言葉を引かれて、「私達は過去から力を貰つてゐる存在である。古典を読むと今を思つて力が湧いてくる。しかし現代はなぜ過去から離れようとするのか。私達もいよいよ以て日本の歴史の連続性を心して生きなければならぬ」と結ばれた。

第三日目

（八月二十二日・日曜日）

講義 「歴史の玉の緒」

国立病院機構都城病院長

小柳 左門 先生



岡潔先生の文章を引きながら、「歴史の玉の緒」について初めに語られた。「玉」とはわが国の歴史の中で輝きを放つ偉人の生き方、『緒』とは玉を繋ぐ命であり、それを受け継ぎ後世に伝へたいと思ふ強い心であらう。そして太子制定の憲法十七条に触れて、第一条「和を以て貴しと為し」の「和」こそ国民が失つてはならない大切なものとお示し下さったものと述べられた。またこの憲法には既に民主主義の理念が立派に謳はれてゐると付け加へられた。

山背大兄王が「一身の故を以て万民を勞するなかれ」と聖徳太子の御精神のままに身を捨てられた

御心は、玉虫厨子「捨身飼虎」図にも通じるものであり、皇室の伝統として代々受け継がれてある誠の心であると述べられ、終戦時の、またその後の御巡幸の折の昭和天皇の御製にそれを辿られ、「戦後、日本復興の礎となったのは昭和天皇の大御心であり、国民が大御心にお応へすることで経済復興が成った」と語られた。

続いて今上天皇の皇太子時代、沖縄御訪問の折の御歌や琉歌にも果てなき御心を辿られた。ことに摩文仁が岡の慰霊碑に祈りを捧げてをられる時、過激派が火焰瓶を投げて辺りが騒然となった折、陛下は真つ先に案内役の二人の女性に声を掛け安否を気遣はれた事実を紹介された。

最後に、国民と共にある皇室の伝統は聖徳太子から今上天皇へと連綿と連なる「歴史の玉の緒」として現実に仰ぐことができると述べられた。

会員発表

インターナショナルリスクリミテッド 伊藤俊介氏



イギリス系企業のインターナショナルリスクリミテッド（IRL）における経験を基にビジネスインテリジェンスについて語った。

IRLは大英帝国の時代から全世界に築き上げられたネットワークを活用し、ビジネス戦略上有益な情報「ビジネスインテリジェンス」の収集・分析業務等を行ってあるが、その仕事を通じて日本人として学ぶことは多い。ビジネスインテリジェンスを的確に扱ひ得なければ、海外進出に失敗するだけでなく、技術やノウハウの流出、ブランド価値の低下などの危険性を自ら招くことになる。ビジネスインテリジェンスのノウハウを持つ外国企業をどう活用するか、日本企業は多くの課題を抱へてある。将来はビジネスインテリジェンスを通して国益に関する分野で貢献できるやうになりたい。

東洋紡績(株) 庭本秀一郎 先生



前日の野外研修の折に詠まれた短歌を収載したホッチキス止めの「歌稿」(参加者各々の歌一首以上が載ってゐる)ができたのが深夜十二時で、それから明け方まで仲間の協力を得ながら添削を行ったとのエピソードを披露しつつ、短歌相互批評の手順を説明された。

まづ明治天皇の御製を拝誦して、「良い歌」とは真心の伝はる歌であると説かれ、良い歌を詠む為には真心を覆ひ隠してしまふ「個我」を取り除いて行くことが必要と語られた。その後、第一班から順に一首づつ取り上げ、「二首一文」の原則や「言葉の正確さ」「より具体的に詠むこと」など「短歌を詠む時のポイント」、「添削のポイント」を丁寧述べ、また合宿事務局のアルバイト高校生の短歌や「合宿に寄せられた短歌」も紹介された。

最後に、感動を素直に正確に具体的に詠むといふ創作の折の原則を念頭に班での相互批評に取り組んで欲しいと述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にしようとする力し時間を超過してしまふ班も多くあったが、その自分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

慰霊祭

慰霊祭に先立ち元新潟工科大学教授大岡弘先生（本会理事）から慰霊祭斎行の趣旨・手順が具体的に説明された。その中で「遠き古より今日に至るまで戦時平時を問はず、『祖国日本』を守るために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊を斎庭にお招き申し上げ、ご馳走をお供へして、おもてなしをし、豊かな日本の文化に浴することが出来る幸せを祖先のみ霊に感謝申し上げます、続く者として自らの決意を固める祭りである」と説かれた。

祭儀は講義室裏手の草原に設けられた斎庭で斎行された。初めに祓詞に代へて三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」が山口秀範常務理事によって朗詠され、小野吉官参与が御製を拝誦し、澤部壽孫副理事長が祭文を奏上した。次いで参加者全員が「海ゆかば」を奉唱した。

阿蘇の山々に囲まれた草原には満点の星が輝き、亡き師亡き友の面輪が間近く感じられる如くであった。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

御製拝誦

明治天皇御製

虫聲（明治四十四年）

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

四海兄弟（明治三十七年）

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

をりにふれたる (明治三十七年)

石だたみかたきとりでも軍人みをすててこそうち砕きけれ
おのが身にいたでおへるもしらずしてすすみも行くかわが軍びと
いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして
世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

をりにふれたる (明治三十九年)

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のものがたりしつ

天 (明治三十七年)

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

友 (明治三十六年)

もろともにしたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

昭和天皇御製

(昭和二十年)

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

今上天皇御製

硫黄島 二首のうち (平成六年)

「精魂を込め戦ひし人未だ地下に残りて島は悲しき

祭文

火の国に雄々しく聳ゆる阿蘇山に、緑豊かに連なる山並み、広がる国原、今し天つ日は沈み、夕風そよぐ、これの草原をみ祭りの斎場ゆはと定め、今宵平成二十二年八月二十二日、われら集ひて、祖国日本の遠き古へより今に至る迄、平時戦時を分たず、み国のために尊きいのちを奉げ給ひし数限りなきみ祖たちのみたまを、これのみ祭りの斎場に魂よばひまつり、ささやかなれども海の幸・山の幸種々の品くさくさをみたまのみ前に献げまつり、をろがみまつりて、われらは、みたまをなくさめまつらむとす

顧みれば、全国民一丸となりて戦ひし大東亜戦争に敗れし後の米国の占領政策による日本の文化・伝統の徹底的なる否定は、日本人の精神を蝕み、み国の行末を愈愈危ふくすれども、偏ひとに、昭和天皇 今上陛下の御聖徳に導かれ、み国の生命は守られて来ぬ

しかれども、み祖の生き方に自信と誇りを失ひし心は、教育界を始めとして、政界・財界等全国津々浦々にまではびこり、日本の教育・外交・国防などに独立自尊の精神は失はれ、道をふみ迷ひ、今ただならぬ、憂ふべきみ国のさまとはなりぬかかる時、われら、五十五年の歳月を重ねしこの合宿教室に集ひ、老いも若さも、もろ共に心を働かせ 言葉を修め 日本文化の良き伝統を学び 共に世に立つべき友となりなむと、諸講義に耳を傾け、班別討論などを重ね、朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ

今より後は、大君のみことかしこみ、み祖のみたまのみまもりを信じ、つとめの庭に、学び舎に、はたまた教への庭に、世の正道をきりひらき、国の内外にはびこるまがごとを、もろともに力を協せ、打ち払はむと誓ひまつらむ

天翔あまがけるみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてを守らせ給へと、ここに第五十五回全国学生青年合宿教室参加者一同に代り

澤部壽孫 謹み敬ひ畏み畏みも曰す

夜の集ひ

差し入れの飲料を手に参加者全員でキャンプファイヤーの炎を囲み、学生班有志らの趣向を凝らした寸劇や歌の出し物に盛んに声援や拍手が送られた。また各班の垣根を越えた全員参加でのクイズ大会も行はれ、難問珍問尽しの中、正解が発表されるたびにため息と歓声が起こり、大いに盛り上った。終りに参加者全員で「元寇」と「進めこの道」を歌ひ、一体感を味はふ貴重な一時となった。

第四日目

(八月二十三日・月曜日)

講義 「持続する志―橋本左内『啓発録』に学ぶ―」

(株)寺子屋モデル社長 山口 秀 範 先生



初めに小田村寅二郎先生の一文を引きつつ「この合宿を通して皆さんの胸中に沸々と湧いてきた思ひをスピリット、『志』といひたい。この時間は自分の志の立て方を橋本左内の『啓発録』から学びたい」と問ひ掛けられた。そして左内が安政の大獄に斃れる二年前、「海外の事情第一に御推察之有り度候」と友に書き送ってゐるが「中西先生が言はれた正しく現状を認識した上で戦略を練る。新しい日本人」の典型を左内に見ることができると指摘され、『啓発録』誕生の経緯を説明した後、内容に入られた。

『啓発録』の五項目は、相互に関連してゐるとして、次のやうに話された。「一、父母に寄りかかる

心を取り去る『去稚心』。二、恥辱を無念に悔しく思ふ意気張りである『振気』。三、『振気』はすぐ後戻りしかねないが、その

心持ちを失はぬための「立志」。四、その志を支へて強化するのに不可欠な「勉学」（素晴らしい人の行ひを手本にして学ぶ）。五、学に勉めて行くうちに芽生える傲慢や独善を正してくれる益友を持つ「択交友」である。

左内は、同時期に江戸伝馬町の獄にあった吉田松陰とは直接の接触はなかったが、英雄は英雄を知るの譬へのやうに、松陰が『士規七則』に掲げた「三端」は期せずして左内の言ふ「立志」「択交友」「勉学」と共通してゐる事実を紹介して、『啓発録』は、平成の私達へのメッセージでありそれをどう受け止めるかは私達次第である。日本の歴史は一本に連なつてゐる。そこに私達も連ならうとしてゐる」と締め括られた。

全体感想自由発表

挙手をして登壇した参加者は率直に胸の裡を語った。

「天皇や皇室は、歴史的権威だけでなく、お一人お一人の人間性が素晴らしいのだと言ふことを和歌を通して感じる事ができた」「日本人の崇高な心を引き継ぐようにしないと、我が国は滅亡してしまふ。日本を守る担ひ手となるバトンを渡されたの思ひがする」「先人の思ひとか日本人としてとかを考へてもみなかったので心境が随分変わった」「日々驚きの連続で勉強不足を痛感した」「具体的なエピソードを通して天皇の民を思ふ御心が感じられた」「歴史上の人物が伝へようとしたことが実感できた」「歴史の繋がりを実感したが、目の前の人との感じ合ひも大事だと思った」「日本人の大切な心を受け継ぐべく日々努めることが肝要だと思った」「昔の人が後ろに付いてゐると感じた」「短歌の相互批評に参加して心持ちをどう表現するかといふことで多くのことを学んだ」。。。

閉会式

国歌斉唱は開会式の折に比べ何倍も力強いものとなった。主催者を代表して磯貝保博副理事長は「皆さんの心に疲労感があるのは多くのことに心を遣ったからだと思ふ。歴史の大切さを実感したとか、勉強すべきことの多さに気付いた等々の感想発表をお聞きして、有意義な合宿であつたと喜んでゐる。ここで学んだことを御家族や友達に是非伝へて欲しい」と挨拶した。九州工業大学三年大森淳史君は「この合宿で同じ講義を聴いた班員と熱く議論を交はすことができて本当に嬉しかった」と感謝の思ひを述べた。そして学習院大学四年藤尾允泰君が閉会を宣言して第五十五回全国学生青年合宿教室は幕を閉じた。

助言者の紹介

(社)国民文化研究会 理事長

元・日商岩井

元・(株)講談社

(社)国民文化研究会 事務局長

月刊「国民同胞」編集長

(株)寺子屋モデル代表取締役

元・小田原市立矢作小学校校長

東急建設(株)

元・新潟工科大学 教授

山口県立熊毛南高等学校教諭

(株)IHIEアロスペース

興銀リース(株)

日章工業(株) 代表取締役社長

新明電材(株) 常務取締役

熊本製粉(株)

IMSグループ本部 総合企画部

熊本県立熊本高等学校教諭

昭和音楽大学名誉教授

福岡県立直方高等学校講師

中島法律事務所

熊本市役所

熊本県立大津高等学校校長

上村 和男

澤部 壽孫

磯貝 保博

稲津利比古

山内 健生

山口 秀範

岩越 豊雄

奥富 修一

大岡 弘

宝辺矢太郎

内海 勝彦

小柳志乃夫

藤新 成信

飯島 隆史

吉村 浩之

最知 浩一

久保田 真

國武 忠彦

小野 吉宣

中島 繁樹

折田 豊生

白濱 裕

元・キュービー(株)

元・富山県立富山工業高等学校教諭

SIS(株)

元・福岡県立小郡高等学校校長

神奈川県立麻生高等学校教諭

国立病院機構 都城病院 院長

(株)石村萬盛堂 代表取締役社長

九州大学 名誉教授

きまぐれ書房 店主

(助)交通事故総合分析センター 理事長

福岡県立筑紫丘高等学校 総括教頭

損害保険料率算出機構

鳥栖市役所

宮崎県立都農高等学校校長

日本郵便大村支店

羽後信用金庫石脇支店

日本ユニシス(株)

(株)寺子屋モデル

北九州市立医療センター 技師

若築建設(株) 九州支店

折尾愛真短期大学 講師

(株)アルバック

中尾スタジオ

福岡中央公共職業安定所

山本 伸治

岸本 弘

内田 巖彦

志賀建一郎

原川 猛雄

小柳 左門

石村 僮悟

清水昭比古

大内 保治

小田村初男

小林 至

鏝 信弘

西山 八郎

竹下 鉄郎

橋本 公明

須田 清文

大町 憲朗

廣木 寧

森田 仁士

池松 伸典

松田 隆

北浜 道

中尾 国博

古川 広治

日本青年協議会

熊本市役所

アサヒ飲料(株)

日本青年協議会

東洋紡績(株)

(株)寺子屋モデル 講師

(株)ハウインターナシヨナル

インターナシヨナルリスキリミテッド

(株)ラック

祐誠高等学校 教諭

鎮西中学校 教諭

日本青年協議会

陸上自衛隊

私立下関国際高等学校 教諭

熊本市立湖東中学校 教諭

(株)ハウインターナシヨナル

松岡 篤志

濱口 知久

澤部 和道

外村 聖典

庭本秀一郎

横畑 雄基

桑木 康宏

伊藤 俊介

高橋俊太郎

小林 国平

大津 健志

三萩 祥

森 浩典

秋田 崇文

山方富美子

多賀祐之介

合宿運営本部 古川 広治・久保田 真・廣木 寧

桑木 康宏

指揮班 小林 国平・最知 浩一・濱口 知久

谷口 耕平

事務局 稲津 利比古・山本 伸治・漆原 弘子

福岡友朋高等専修学校

熊本県立熊本高等学校

小川 夏穂

日野由佳子

写真班

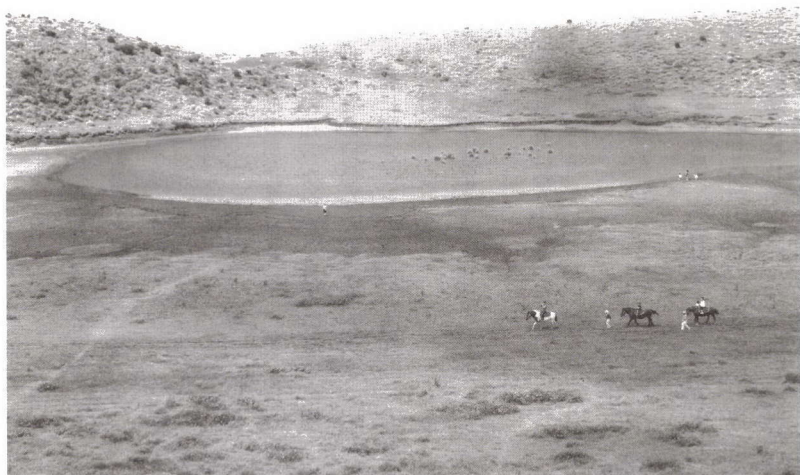
熊本県立熊本高等学校
中尾スタジオ
北九州市立医療センター

木下 美優
中尾 国博
森田 仁士

走り書きの感想文集

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもです。



第一班—男子学生—

恩師に誘われて参加

(久留米工業大学 機械システム 一年 黒田 光)

高校時代の恩師、小林国平先生に引つ張られてきたこの合宿ですが、文学の苦手な私には辛いものがありました。古典、短歌、そして歴史。総て今まで避けて来たものです。

しかし、この合宿で講義をされた先生方の熱い思いの込められたお言葉に心を打たれ、少しですが、文学の世界に興味を持ちました。今でも短歌は感覚でしか分かりませんが、いずれ詠める様になりたいです。

今回の合宿で得た知識は、今までの生き方では手に入らない物ばかりでした。本当にありがとうございます。

工学を志したる我が身にはまばゆく見ゆる短歌の世界

胸がうちふるへた元寇の絵詞

(埼玉大学 教養 二年 山中利郎)

私が一番感動したのは、志賀建一郎先生の「元寇」の講義だった。所謂教科書の通説のまま信じてゐたが、資料とともに示された新説は非常に魅力的であり、日本軍が蒙古軍を撃退したといふ事実は、日本人である私にとって誇るべきもの

と思つた。蒙古襲来の絵詞の軍記物語的な古文の格調高さに胸がうちふるへた。

志賀建一郎先生の御講義を拝聴して

寄せ来たる冠しりぞけしすらをの功し語る姿雄々しき

外つ国に勝ちし戦を明らかに国を誇りを取り戻したし

正直短歌は苦しいと思つた

(職業能力開発総合大学校 一年 池松卓実)

今回の合宿では、自分の知らなかつた日本の歴史を知ることだけでなく、班の仲間との研修などで見聞が大きく広がりました。また友達と一緒に学ぶことの大切さを知り、これまでの勉強を見直すきっかけにもなりました。これからも合宿で学んだことを生かして大学生活をより豊かにしていきたいと思ひます。

山登り疲れを忘れふと気づく道にたたずむ石の足跡

先人の思いを受け継ぎたい

(中村学園大学 流通科学 三年 相良真史)

日本という国を想つて、限らない先人の方々が命を捧げてきたことを、身にしみて感じさせて頂いた。今自分は何か出来るのか。これからの人生をどう生きてゆくのか。今自分がやるべきことは、この先人の方々の偉大な魂とそれを引き継

いできた方々の想いを引き継ぎ、後に繋いでゆくことだと確
信している。

先人の篤き想ひに胸打たれ我が身をもって国を変へゆく

短歌を通じて自分の心に向き合えた

(同志社大学 法 三年 佐々木 保)

私は、小田村寅二郎先生が唱えられていた「スピリット」
を更に深く学ぶことが出来ると想って参加した。そしてこれ
を最も考えさせられたのは和歌相互批評の時だ。自身の決意
を詠んだ和歌が、班員との相互批評を通じて散漫かつ具体性
を欠いた物であると気づかされた。その上で、私は何故「ス
ピリット」を確立していきたくと思ったのか、深く考えるさつ
かけとなった。短歌とは、自分の心に向き合い自分でも気が
つかないような感情を再発見し、感動する心を養う物である
と感じ、今後も短歌を詠んで、自ら心と対話をして、私の考
えるスピリットを作っていききたい。

國武忠彦先生のご講話を聞きて

先生の活き活きと語る言の葉が私の心に語りかけます

班員の全体感想自由発表を聞きて

あふれだす想ひのすべてが語れずに悔やみし君の心は大なり

もう二度と来れぬかもしれぬ阿蘇山の広大な景色を目に焼き付けぬ



主催者を代表して上村和男理事長は「これからの人生をどう生きていくべきかを考へる三泊四日にして欲しい。先人が伝えてきた国の歴史を頭で考へるだけでなく、国柄の大切さを各自が自分の心で感じ取るべく努めて貰ひたい」と挨拶した。

持続的学習の重要性

(九州工業大学 院 二年 鷲頭祥平)

今回大きく気づかされたのは、持続的学習の重要性です。

昭和天皇御製の

爆撃に倒れゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

のお歌は、これまで何度も拝誦したのですが、今回ほど昭和天皇のお気持ちに心震えたことは有りませんでした。この合宿での「学問」の大切さをより一層感じ、これからも学び続けていきたいと思いました。

四度の合宿教室を通して

学問はただ先人の御心を深く感ずるためにのみあり

学生・社会人の自由発表に勇気づけられた

(日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲朗 55歳)

最終日の全体感想自由発表に登壇される学生・社会人の皆様のお話をお聴きし、大変勇気づけられました。それぞれに得た感動を持続していくことは大変難しいことです。今回の合宿で知り合った方々に、手紙などを通じて、実践の喜びや、ジレンマから来る苦しみなどを、言葉で伝えることから始め

て見たいと思います。北海道からの二名の参加者と、今回参加できなかった二名の友人とをつなげるよう通信を始めたいと思います。

慰霊祭にて

広ひろされる阿蘇あその齋庭いはいにおこそかにみ魂まつれりかしこみまつりてみ魂らを迎へむごとくみ子たちの声も聞こえ来心なごむも

この年もみ魂まつりにつかへまつり心の中すべられゆくかな

日に日に深まる班別討論

(柳寺子屋モデル 横畑雄基 34歳)

今回の学びの中では、建国から現在に至るまでの「歴史の連続性」について感じる事ができた。初参加者が多かった一班は、当初表面的な漠然とした感想しか出てこなかったが、班長鷲頭祥平君の努力もあり、日に日に具体的なポイントを押えた話が出来るようになった。

特に、小柳左門先生の御講義で「歴史の中に光り輝くものを、各々が緒となつて受け継いで欲しい」と語られた言葉に対する学生諸君の反応が素晴らしかった。「事実の羅列ではなく、歴史を温かい目で見る事が出来た」「先生の力強いお言葉に、歴史を受け継ぐという事の意味を感じた」という反応が、班員それぞれの心とも波長を合わせ共感できたことが何より良かった。

日の本の輝く歴史見いだして伝へゆきたり今も昔も

連綿と続く歴史を併せ持ち友らと過すこのひとときを

第二班 男子学生

自分をさらけだした短歌創作

(東京理科大学 理 四年 甘楽泰久)

一番印象に残ったのは短歌創作であった。初めての創作ということもあり、短歌を創作するときに重装備で考えた。しかし、いくら身をかためても一首も創ることはできなかった。逆に一つ一つ、身に固めているものを脱いでいくと、今まで自分では知らなかった赤裸々な自分が見えてきた。自分の全てをさらけ出し、そして残った本当の自分というものを知る良いきっかけになった。凍りついていた自分の心を短歌を通じて溶かし、温めていきたい。

和歌を詠み真の自分が現れり凍てつく心溶かさるること

自然に涙が出た

(岡山理科大学 理 一年 妹尾亮汰)

私は一番年下の十八歳、とても不安でしたが、皆私を可愛がってくれ、とても嬉しかった。一番印象に残っていること



開会式は、九州工業大学大学院1年伊藤健司君の開会宣言で幕を開けた(写真右)。日本大学2年小柳辰介君は「日本人として如何に生きていくべきなのかといふことを、共に学び語り合っていますませう」と合宿への決意を述べた(写真左)。

は、天皇陛下がおよみになったお歌を聞き、自然に涙が出てきて、とても感動しました。夜は友と真面目な話を延々とし、このような話ができる仲間が減多にいないと思い、とても良い体験をしました。

お別れの時の早くも近づきて涙を隠し笑顔で振る舞ふ

自分自身が立派に生きることの重要性を思った

(九州工業大学 院 一年 伊藤健司)

今回の合宿で「歴史の連続性」「日本の危機」を感じ、自分が過去の偉人の言葉から力をもらい、自分も日本人として充実を計らねばならないと思いました。私も日本の一部であり、日本を恥じることのない国としていくため、私自身が立派に生きることの重要性を思いました。

日本が国際社会で存在感を失っている昨今、今後十年間の日本国民の思想の変化が重要なカギになります。私が合宿で感じたことを実現できる日本を作ることにかけていきたいと思えます。

先人を親しく想ひ読み解けばやさしく包む真心を感じず

御製に昭和天皇の深い御心を感じた

(東京大学 教養 二年 高木 悠)

一番印象に残ったのは小柳左門先生の御講義とその後の班

別研修であった。御講義では、「捨身」を体現なさってゐる昭和天皇のお心の深さが思はれ、それは班別研修でさらに深まった。班別研修では、調氏の文章を輪読したのだが、読み終はった後、言葉にならない静かな時間が流れ、班員の皆と、昭和天皇の因通寺の御製に込められた深いお気持ちの一端を共有できたやうに思ふ。班員の一人が、文章を読んで涙が出たのは何年ぶりだらうと言ったのが心に残ってゐる。他の御製についても、一首一首にこめられた御思ひやその背景を知りたいと強く心から思った。

一首一首に込め給ひたる御氣持ちを吾もたどりたきと切に思ひぬ

歴史の中に生きている祖先の言葉

(福岡大学 経済 三年 岡松侑希)

心に残っていることは、日本に昔からつみ重ねられてきた歴史の中の祖先の言葉や思いが現代にもつながっていると感じたことです。柿本人麻呂の御講義をして頂いた國武忠彦先生が、人麻呂の歌に感動されるのを見て、まるで現代の歌人の話をしておられるようで、千年以上も昔の先人の気持ちを感じとれる日本語のすばらしさを感じました。

友だちと互ひの思ひを語りし楽しき夜の時を忘れじ

歴史の玉の緒を切らせてはならない

(日本青年協議会 松岡篤志 40歳)

阿蘇の大自然につつまれ、寝仏(根子岳)の上に月が皓々と照り渡る幻想的な雰囲気の中で慰霊祭がとも心にしみ入り、「歴史の玉の緒」を結びながら営まれてきた合宿のいのちをしみじみ感じました。

「くにの歴史の緒が切れると、それにつらぬかれて輝いておたかういった宝玉がばらばらに散りうせてしまふだらう。それが何としても惜しい。他の何物にかへても切らせてはならないのである」との岡潔先生のお言葉は、そのままこの合宿教室を営んで来られた先生方の願ひとして貫かれてゐるのである。

講師の中西輝政先生は、国難を切り拓く心と知略を備へた新しい日本人出でよと訴へられた。国文研の道統に連なる者として真剣に真向かふべき課題として心に刻んで参りたい。

(熊本市役所 折田豊生 59歳)

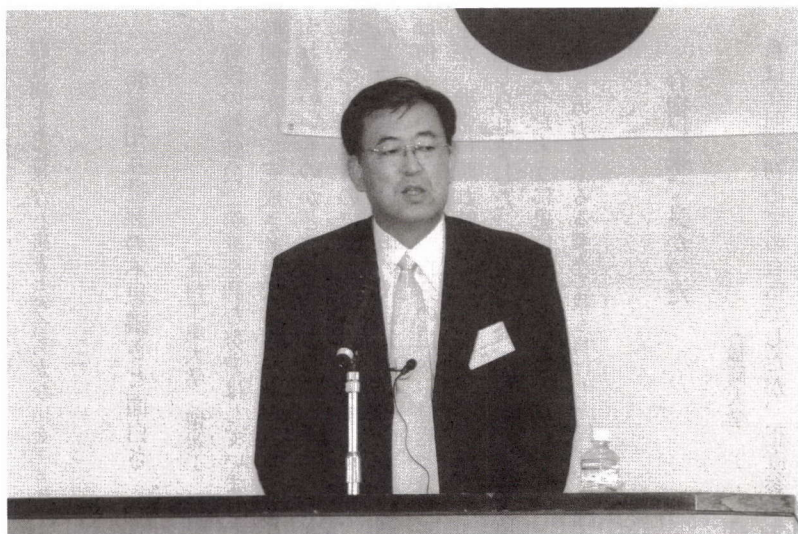
よき班友に恵まれ、充実した数日を過ごすことができたことを有難く思ふ。少人数ながら本当によい学びの集ひだった。

最後の班別研修

澄み透る気の部屋内に満ちてあり友らと別るとき近づきてこの日々にくさぐさ思ひ返しつつ友らが語るを面見つめ聴く

おのおの別れゆくとも呼び交し言ひ交し共に学びゆきなむ

カメラ・レポート3



合宿導入講義。「古典輪読に学ぶ日本人の知恵」と題し、日章工業㈱代表取締役・藤新成信先生は、聖徳太子『維摩経義疏』の「若し自他の二境を存して修行せば、即ち修する所廣からずして…」に触れ、「他と連なりつつ生きてある自己」を凝視することの大切さを輪読から学んだと語られた。

志なほ強くあれいつの日かまたまみえたきこのよき友らよ
み国今ただならぬときおのがじし持てる力を尽くさざらめや

末次祐司先生を偲びまつりて

朝空に雄々しくそびゆる高岳を清しく仰ぐ草原に立ち

朝露に濡れたる草地踏みしめてゆけばしくしく亡き師偲ばゆ

この集ひに来まさむことを楽しみに語りまししはこの春なるに

ひむがしの山の端輝き清らけき光放ちて朝陽今出づ

陽の光受けてきらめく芝草の葉末の露の光清けし

師の遺し給ひしみふみは悲しくも「葉末の露」と題されてありき

儂くも清き葉末の露に師のみ姿み心重なりて思ゆ

遺されしみふみのみ言葉辿りつつわが師のみあと訪ねまつらむ

第三班—男子学生—

班長のつとめに緊張したが…

(日本大学 法 二年 小柳辰介)

班長といふことで大変緊張させられた。なかなか皆の意見を引き出せず、沈黙の時間が多々できて、どうすれば合宿を有意義なものにできるかわからなくなりました。とても落ち込んだ。しかし、二日目の草千里散策から徐々に班別研修でも一人、二人と感想を述べてくれるやうになり、最終日には皆この合宿が楽しかった、来て良かったと言ってくれて

無事に終了した。班の仲間たちがまた来てくれたらと思ふところから来年が楽しみでたまらない。

四日間ともに学びし班友と再会ちかひ山を下りぬ

短歌相互批評の不思議さと面白さ

(九州工業大学 情報工 三年 権藤尚樹)

普段の勉強会で短歌を詠む努力はしていましたが、今まで時間をかけて完成させた歌は何かざちなく感じられ、どうすればいいものかと悩んでいました。今回、最初に詠んだ歌もそのようなものであったと思います。しかし、班のみならずと話を進めていく中で、自分が本当に表現したかった感動は何かということが、自分の口から自然と発せられていく様子が、非常に晴れ晴れとしていて、また不思議で面白おかしく感じられました。「心踊りぬ」という表現を用いたのは初めてだったように思います。

御友らの力あふるる姿みて我も負けじと励まむと思ふ

合宿に来て良かった

(福岡大学 工 二年 廣木文屋)

私は今回が初めての合宿でしたが、正直参加するつもりはなく、むしろ参加しないことを心に決めていました。そんな時、今回合宿の指揮班長であり、また私の親戚でもある小林

国平氏から参加の誘いの電話を受けました。私は合宿に参加しないことを伝えましたが、私自身、参加しないことに感情的になってこだわっていることを自覚していました。しかし、兄さん（小林氏）はそんな私を受け止めてくれ、「俺はお前に参加して欲しいんだよ。」と言ってくれました。その言葉がとても嬉しく、私はありのままの自分で合宿に臨もうと決心出来ました。実際に合宿に参加し終えて、今色々な感情が湧いてきており、言葉にするのは難しいですが、あえて言うなら「来て良かった。」と思います。ありがとうございます。合宿来ていろんな思ひに浸りては己が思ひを確たるものとす

日本のことをもつと知らねば

（東海大学 農 二年 寺井祥一）

歴史、古典などの知識がなかったため、講義の内容が自分にはとても理解しづらかったのですが、班別研修で話し合うことで、なんとか理解することが出来ました。日本人として生まれたのなら、やはり日本のことをしっかり知らなければいけないと思いました。

学舎の講義で共に学びたる歴史のつながり友とのつながり

カメラ・レポート4



歴史講義。「元寇 文永の役の実像—蒙古襲来絵詞を読む—」で元福岡県立小郡高校長・志賀建一郎先生は「絵詞を読めば往時の日本人の強さ、素晴らしさが分るはず」と語られ、絵詞の一節を参加者全員で朗読した。

人と人との繋がりのお大切さを感じた

(福岡工業大学 工 一年 井手崇富)

勉強が嫌いな私は、この合宿は自分が参加するものではないと思っていました。高校時代の恩師である小林国平先生に半ば強引に誘われ参加しました。実際に合宿が始まって、講義と研修ばかりで最初は全く楽しくありませんでしたが、二日目の阿蘇の火口と草千里へのオリエンテーションで班員と仲良くなり、嫌なことも忘れる程楽しく過ごすことが出来ました。最終日には、難しい講義にはまだ抵抗感がありました。この合宿では、人と人との繋がりのお大切さやその楽しさをとっても強く感じました。特に班の仲間との繋がりはいつまでも大切にしたいと思います。今は合宿にいられて本当に良かったです。色々な勉強も出来て良い経験になりました。

日本の歴史の連続性の中で如何に生きて行くか

(インターナショナルリスタリミテッド 伊藤俊介 33歳)

今回十年ぶりに合宿の全日程に参加したが、十年間の社会人経験を積むことよって、ようやく学生時代には知識としてしか理解出来ていなかったことが、あらためて感動として自身に迫って来るが多かった様に思う。一方この感動を、山口秀範先生が御講義で紹介された橋本左内の「啓発録」に

ある「振気」から「立志」の段階へ繋げて行けるか否かは、ひとえに合宿を終えた後の私自身の日々の生活にかかっているのだということ強く感じる。今回の合宿を通して諸先生方が共に我々にお示しになられた「日本の歴史の連続性」を深く感じつつ、日本の歴史の中で今という時を担う者の一人として如何に生きて行くのが、私自身の課題として明確になったのだと思う。明日からは、日々の営みの中における真に現実の問題として、この課題に取り組んで行こうと思う。師の君ら時に涙し語らるる御教へ胸に熱く迫りぬ
我もまた歴史を担ふ一人とて一日一日を歩み行きなむ

第四班 男子学生

松陰の魂に心打たれた

(学習院大学 法 四年 藤尾允泰)

今回で二回目の合宿参加になりましたが、昨年同じ班で熱く語り合った「友」と再会できたことをたいへん嬉しく思います。

ご講義の中で特に心に響いたのは、中西輝政先生の吉田松陰のお話です。迫りくる外国からの危機に際して、生涯を祖国日本のために捧げられた松陰の生き様、魂に心打たれました。

そのような崇高な日本精神を我々の先祖が脈々とつないできたからこそ今の日本があり、私たちが生きています。そしてまさに私たちが日本人としての心というバトンを持って走るランナーです。私はそのバトンをしっかり後世につないでいける人間になりたいと思います。そのためにも、ここで出会った「友」を大切にして益友とともに学び続けていきたいと思えます。

合宿で出会ひし友とともに学び祖国日本の未来を担はん

この体験は何物にも代え難い

(立命館大学 法 三年 吉富孝明)

私がそもそもこの合宿に参加しようと思つたのは著名な論客の方のお話をお聞きできるといふ、半ばミーハー精神に近いものでした。ですが、中西輝政教授の日本の国家戦略に関するお話が大変為になったのはもちろんですが、目からうろこが落ちるような志賀建一郎先生のお話をはじめとする諸先生のお話や、阿蘇中岳火口を覗き込んだこと、草千里で初めて乗馬を経験したこと、そして夜の集いで皆様と盃を交したことなど、全て私の精神の大きな糧となりました。来年また参加するかどうかはわかりませんが、教えを受け、交流を持ったこの体験は何物にも代え難い私の財産であるということは間違いありません。

永らへばさらに活躍したるらむ松陰左内の早世を惜しむ



真剣な面持ちで講義に聞き入る。

日本を学ぶことができた

(九州工業大学 情報工 三年 藤瀬拓臣)

今回の合宿に参加する際に、私は合宿が終わる頃にはこうなるう、○○について理解をより深めようといった具体的な目標は一切持っていませんでした。ただ一点、パンフレットに載っていた「日本を学ぼう」という表題を見て、そのことのみを目的として合宿に臨みました。三泊四日の充実した合宿であったと合宿を終えて感じるとともに、「日本を学ぼう」という言葉に過不足なく今回の合宿のご講義などで経験したことが体現されていると思えました。日本を知ることができました。ありがとうございます。

先生の熱意を感じる講義受け充実とともに合宿を終へる

心に残る言葉をたくさんいただいた

(株)ラック 高橋俊太郎 32歳)

今年は何しぶりに班に入ることができました。長く事務方の指揮班のお手伝いをさせていたただいていたため、社会人としては初めてのフル日程の参加とも言える。古川広治運営委員長をはじめ関係の方々のお気づかいに感謝申し上げます。

ただし、学生班の班長を務めるといふ課題を与えられての参加となった。最初は「自分に務まるだろうか」と思ったが、班のメンバーの学生達は素直で、最初はぎこちなく話してい

たのが、最終日は色々感想や意見を述べてくれるようになったのは大変うれしい。また、班付の小柳志乃夫先生、外村聖典先生には多くのご指導・補佐をいただきありがたかった。

今回は先生方のお話に集中して拝聴することができ、「見ること」(直接目に見えないものを見る)ということについて改めて考えさせられるなど心に残る言葉をたくさんいただきました。この振気が一時の酔いで終わらないように、日々少しずつでも古典の輪読などを続けたいと思います。

最終日の朝の集ひの国旗掲揚で君が代を歌ひて

中岳の前に向かひて高らかに歌ひあげたる言の葉清しすが

貴重な体験と思ひ出になつた

(杏林大学 総合政策 二年 大淵将之)

ゼミ長の寺田さんが来られなくなつたということと、急遽参加させていただきました。初の参加ということと、大学では僕一人だけが参加するということとても不安でした。また、合宿の講義についていけなかつたらどうしようという気持ちもありました。しかし、寺田さんや豊島典雄先生は大淵君なら大丈夫だよと優しく励まして下さいました。両親にも、こんな素晴らしい方々がいらつしやるのだつたら、受けて下さいと言われ、合宿への意欲と熱意がさらにわきました。

友だちもすぐででき、班の人たちともあつという間に打ち

とけ、夜の集いでは皆と酔い、とても楽しい思い出ができませんでした。草千里へは体調が思わしい状態ではなく残念ながら行くことができませんでしたが、この合宿で得たことは、私にとつて忘れることができない、とても貴重な体験と思い出になりました。

益友との貴重な意見のやりとりは人見知りの私の薬となりぬ

充実した日々を送れた

(福岡大学 法 四年 中尾修宇弥)

初めは正直とんでもない場になってしまったと思います。何の知識もない自分がものすごく場違いな気がして本当に緊張しっぱなしでした。ただ、二日目からは積極的に参加していこうと意識したのもあつて、一変して、何というかとても満ちた日々になりました。

本当の意味で充実した日々を送れてとても良い経験になりました。ありがとうございます。

外国の工作に危機感を感じた

(日本青年協議会 外村聖典 35歳)

中西輝政先生のご講義が強く心に残った。"何故に保守の連帯が生まれないのか"との質問に対し、大きな視野で見ると、日本に強い保守が生まれてほしくないと考える外国のイ



合宿二日目の「朝の集い」にて。清々しい空気の中、皆でラジオ体操をする。

ンテリジェンスが動いていることを指摘された。我が国の深くまで外国の工作が入り込んでいることに危機感を強く感じた。

そのような外国のインテリジェンスに負けない国を作る為には、「歴史の玉の緒」と表現されたように、歴史を貫いている日本人の心を強く把持しなければならぬと思う。岡潔先生の言葉で、「ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つという強いつながりによって、たがいに結ばれているくには、しあわせだと思いませんか」は心に染み入る。決して外国に侵すことのできない、「歴史の玉の緒」を甦らせていく勉学を積み重ねていきたいと思う。

うるはしき歴史の玉を結びたる日本人を多く出さむ

外国の禍はねのける新しき日本人を多く出さむ

自分のスピリットが験されてゐる

(興銀リース株) 小柳志乃夫 54歳

藤新成信君の導入講義の何の為に学問をするのかの話から、志賀建一郎さんの歴史講義、國武忠彦さんの人麻呂論、小柳左門氏の歴史の玉の緒・・いづれも素晴らしい講義でした。

班別では班付としてどこまで学生諸君の心に迫りえたのかはなはだ心もとないものがあります。東京の学生指導を一年余り続けてきて思つてゐたところでもありますが、ある程度のところまでは話せても一押しが出来ない。そこは山口秀範

さんのお話の「スピリット」が勝負なのであつて、自分のスピリットが験されてゐるのだらうと思ひます。その意味で自分はまた藤新君の「何の為に学問をするのか」といふ問いにもう一度戻ることになります。学生諸君との勉学を何らかの形で続けていきたいと思ひます。

古川広治 合宿運営委員長

心やさしき君が回りに生き生きと若きら働く姿たのもし

今林賢郁さんを

いかばかり合宿の上を思ひましまむ東京の先輩みともを偲びまつるも

第五班—男子学生—

これで終はりではない

(下関国際高等学校 秋田崇文 24歳)

合宿は自分の心を奮ひ立たせる絶好の場である。しかし、この環境に自分が飛び込むには、毎回勇氣が要る。今回この場に臨むに当たり、大学の先輩である瀬木裕太郎兄より、心こころさびてうなだれる時ぞ素直なる言葉に触れつつ学びゆけ友といふ歌を頂いた。

合宿での生活は素直な学生に囲まれ、勉強が楽しいと感じることが出来た。また、彼らと過ごすことで学生のやうな瑞々しい気持ちになれて、僕の心が素直になつてゆくのを感じた。

僕は良い班に恵まれ、皆に感謝の気持ちであるが、個人的に踏み込んだ話をもう少ししたかったといふ学生もゐた。しかし、これで終はりではないと信じ、また互ひに成長して会ふやうにしたい。

また、班付きの先生が学生時代の輪読会でお世話になった小野吉宣先生で恐縮する思ひでゐたが、合宿内で小野先生の真の心の強さに触れることが出来、僕の心に明かりが灯つたやうな体験をさせてもらった。北浜道先生は班付きをして下さるのが三回目で、研修に於て僕の迷へる司会を上手に方向修正して下さい、班は有意義な研修を送ることが出来た。両先生には感謝の気持ちで堪へない。

橋本佐内の啓発録に心動かされて

今よりは一年の後如何にぞと決意新たに学び行きたし

縁ありて阿蘇に集ひし友どちと再び会へる時の待たるる

友と打てばきれいなひびきが返る様な輪読が出来た

(九州工業大学 情報工 三年 大森淳史)

今回の合宿が初めての参加で、どんな合宿になるのか期待一杯で来ました。班員はどういった人で、どんな考え方を持っていて、班別研修ではどんな意見が出て、どういった議論ができるのか、不安もありましたが楽しいものになると思っていました。

実際に個性が強い人達で意見も活発で、とても楽しいもの

カメラ・レポート7



短歌創作導入講義。『「短歌のすすめ」を読んで』と題して、元富山県立富山工業高等学校教諭・岸本弘先生は「短歌創作の意味は、聖徳太子の『自他の二境を分かつず』とのお言葉から読み取られる平等感であり、それは心の通ひ合ひを大切にしてきた日本文化の本質そのもの」と説かれた。

でした。植木秀代君は真つすぐで温かく、なごやかでムードメーカー。相澤守君は保守派で知識も豊富で議論を引っぱり、お酒を飲むと人が変わっておもしろい人。廣木摩理勢君は螢の光を歌うのを嫌だと言っていました。素直で和を乱さず、歌うのは大好きな様でした。奈良崎恵祐君はフットサルをやっていただけあって体を動かすのが大好きな様で、休憩時間に十分ほどパス回しをしていたらとても輝いていました。積極的に関わられませんが次回会う機会があれば、どの様に変わっているか楽しみです。秋田崇文先輩は九工大OB、輪読会OBで久々にお会いしましたが心が表に出てくる所も変わっておらず、そのままを保って生徒と触れ合ってください。北浜道さんは学生より積極的な方で輪読でも発表でも背を押して下さり、良い時間が過ごせました。小野吉宣先生はずばつともを言い、それしてしまった所をすつと解説して下さい、心に沁みる輪読ができました。

ここで出会った五班の学生とは打つときれいなひびき、素直なひびきが返ってくる様な輪読が出来ました。

閉会式学生代表挨拶にて

我が心感謝の言葉言ふけれど他の原稿全て忘れぬ

愛国心が芽生えた

(福岡大学 経 三年 植木秀代)

今回、初めて参加して、まず驚いたことは、参加者の熱意

の強さです。それほどモチベーションが高くなかった僕は、「上手く打ち解ける事が出来るかな。」と思いました。

しかし、そんな心配は無用で、班員の皆さんと心を通じ合わせる事が出来ました。講義の内容はハードルが高く、上手く理解する事が出来ませんでした。が、班別研修で皆と討論していくなかで、理解する事が出来ました。

『創作短歌』では、自分としては良い感じのが作れたと思つたのに、『全体批評』で僕の和歌はダメ出しされました。力不足を痛感しましたが、その後の『相互批評』で班の皆さんが、親身にアドバイスをしてくれ、とても良い短歌が出来ました。

初めて参加した合宿教室はとても良いメンバーに囲まれて楽しく過ごすコトが出来ました。

次回の参加は未定です。来年の七月頃になると悩むと思いますが、参加することになったら、また五班のメンバー達と一緒に活動したいです。確率的に無理だと思えますが。

愛国心がちよつと芽生えたような気がします。参加させて頂き、ありがとうございます。

最終日の空を見上げて阿蘇の山を恋しく思ひて決意新たに

「歴史の連続性」を伝えていきたい

(國學院大學 文 三年 相澤守)

私は今回の御講義全てに共通して先生方がお話しされてる

たものは「歴史の連続性」であったと思ひます。元寇において我々の先人が、今我々が暮らしてゐる日本を命懸けで守らうとした、その実際の戦ひの姿、過去が現在に生きてゐた柿本人麻呂、歴史の玉の緒の一角となられた聖徳太子や昭和天皇など、これらからは過去と現在が密接に結びつき、過去が現在に影響を与へてゐる、過去のない現在には存在しないことを証明する「歴史の連続性」を知ることができました。私は現在、大学で國史を学んでをり、将来は國史の研究者か國史の教員になりたいと考へてゐます。その為の準備として史料を客観的に吟味し、そこに書いてある出来事や先人の考へや思ひをありありと感じられるやう、今後も学問の研鑽を続けていかうと思ひます。そして職に就いた暁には、この合宿で学んだ「歴史の連続性」を國民のみんなに明らかにし、自分達もその連続性の中に生きてゐることを國武忠彦先生のやうにありありと伝へていきたいと思ひました。

友どちと「また来年も」と声交はし合宿終はりて絆深まれり

國武忠彦先生の御講義を聴きし折に

ありありと人麻呂の如く語る師の学びの深さ思ひ知らざる

今までのどの授業よりも楽しかった

(中央大学 文 一年 廣木摩理勢)

初参加の私にとって、志賀建一郎先生の歴史講義は今まで私が受けたどの授業よりも楽しかった。そして新しい元寇の

カメラ・レポート 8



短歌創作を兼ねた「野外研修」。白い噴煙をあげる阿蘇山の火口を覗き込み、緑広がる草千里を散策した。

説は驚きでいっぱいでも素晴らしい講義で、二日目の阿蘇登山は友達と昨日知り合ったばかりとは思えないほど仲良く登れました。小柳左門先生のご講義では自分の名前の由来となった方が出てきて嬉しかった。

小柳左門先生の御講義を拝聴して

我が父の我を名付けし思ひを知る思ひしでうれしき感ず

合宿の全てが私の心に響いた

(専修大学 一年 奈良崎恵祐)

私はこの合宿に親に言われて参加しました。正直あまりやる気もなく、飛行機代、参加費合わせて十万円近くかかり、そこまでして参加する意義はあるのか、ということ熊本行きの飛行機の中で、窓の外を見ながら考えていました。

しかし、全ての日程を終えてこの文章を書きながら合宿を振り返ってみると、本当に充実した四日間だったと思います。先生方の熱い講義、先人達の残した短歌、日本を想う志、全てが私の心に響きました。同時に自分はこのままでいいのだろうか、と強く考えさせられました。自分の生まれた祖国について愛国心と誇りを持ってこれからは勉強していきたいと思えます。

最後に、出会って四日しか経っていないにもかかわらず、旧知の仲のように思える仲間達、心に響く講義、指導を下さった先生方、そして、この合宿を運営していただいた国

民文化研究会の方々に感謝の意を表したいと思えます。

本当にありがとうございます。

時忘れ共に語らふ仲間達もう一度会はう広島の地で

学生時代の澁刺とした心情を回復することができた

(福岡県立直方高等学校 小野吉宣 64歳)

阿蘇登山の車中で大型バスは、ロープウェイの前までしか行かないと案内があつた。安易に流れ、楽をしても阿蘇登山の思ひ出にならないと思つて車中で発言した。大森淳史君が二首の短歌に詠んでゐる、

バスの中「歩む」「歩まず」を話し合ひ笑ひあひつつ歩むに決まりぬ

「学生の思ひ出深き体験を」とすすめたまへる御思ひ嬉し
登山の喜びを相澤守君が次の様に詠む。

山道を語らひながら友どちと火口目指して歩くは楽し

これらの短歌を読み平成二十二年の夏合宿の短歌創作と登山を皆の笑顔とともに心に焼きつけることができた。開会式の後の班別自己紹介に始まり登山してゐる今日の睦み合ひを
廣木摩理勢君は、

つい昨日出会へる友と登りしは阿蘇の中岳仲を深めき
と詠んでゐる。

昨夜は慰霊祭、最後の夜のつどひと体験を同じくした。相澤君が司会をし、植木秀代君が指揮をして「螢の光」を四番

まで歌った。四番の歌詞にある、

「至らん國にいさをしくつとめよわがせつつがなく」

つとめるのは僕なのだと心に銘じた。学生時代の澁刺とした心情の自分を回復することができた。この気持を十分に下つ腹にたたみ込むことができたのは秋田崇文君、北浜道君を始めとする五班の皆のお蔭である。心より感謝したい。

次々に壇上に立ち御友らは素直に思ひ述べてゆくなり

回数を重ねることに内面の成長ありきと友は語りぬ

学問の継続誓ひ班長は弱き自分を乗り越へ行くと

「こんにちは」とひとときは高き声あげて心の橋をかけてゆく君(植木君)

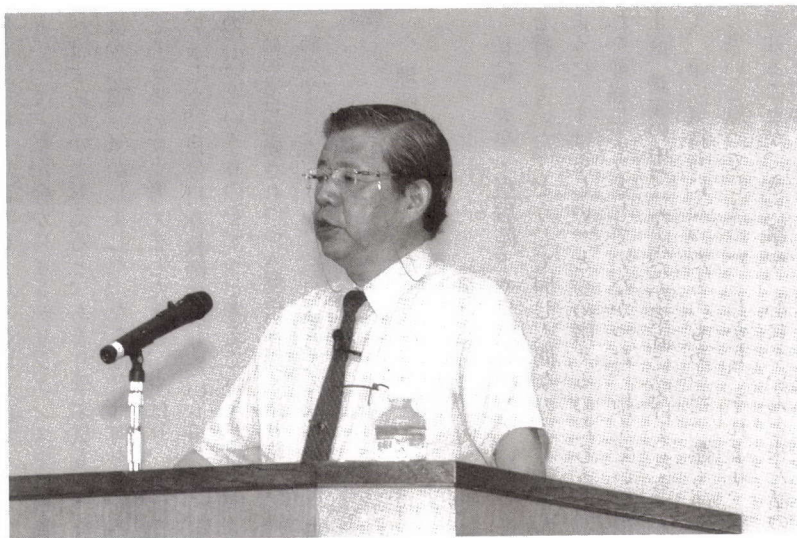
玉の緒の歴史の中ゆ摩理勢てふ名前つけらる父を語りき(廣木君)

「総合力」が問はれた

(株アルバック 北浜 道 48歳)

合宿を通して一貫して、導入講義にて言及された「総合力」といふものが問はれてゐたと思ふ。冒頭の班別研修でいきなり、「自他の二境を等しうす」といふ難語が登場し、どう読み解くかで頭を抱へたが、班の小野吉宣先輩が、「普段の友達付き合いで、楽しみを共にすることはあるが、苦しみを共にすることはあまり無いのではないか」と問ひかけられてからは、班員とこの言葉を自分の経験に引きつけて話し合ふ道が開け、おかげで合宿始めから充実した楽しい時間を過ごすことができた。その場の課題を正確に把握し、解決の方向を身

カメラ・レポート9



『この国はどこへ行くのか』と題し、京都大学大学院教授・中西輝政先生は衰亡する日本を立て直す方策として「わが国のアイデンティティーを身に体し、皇室のあり方を真剣に考へながら、政治の現実に切り込んでいく勇気を持つことである」と述べられた。

近な経験を交へわかりやすく示し、共に解決に尽力すること
で心の距離も近づけること、今回小野先輩のお姿にそれを目
の当りにし、これこそ「総合力」であると感じたのであった。

短歌全体批評にて拙詠の取り上げられて

学生のときより今に至るまで一度もなかりし誉なりけり

自らの思ひの伝はりくるかとおそれのあれど伝はりにけり

庭本先生は「つながり」求むる吾の思ひをあやまつことなく続べ給
ひけり

第十一班—女子学生—

「人の心」というものを考えていきたい

(九州女子大学 人間科学 四年 西山志織)

私が今回の合宿で最終的に心に残ったのは、橋本左内の啓
発録です。私は、志を持つためには、そしてそれが「持ちこ
たへ」るような志になるためには、「平生安楽無事に致し居り、
心のたるみ居候時ハ立事はなし。」とありますように、その
時代の危機を如何に切実に感じることが出来るか、またそ
こに立ち向かおうとしているかどうかが大切であると思いま
した。そう思った時、浮かんで来ましたのは、中西輝政先生
のご講義でした。先生のお話では、自分は知らないところで、
また、日本人の知らないところで蠢いているものがあると、

恐ろしく感じはしたのですが、それが切実に身に迫ってくる
程には、感じられないというのが正直なところだ。だから
といって、私が今からインテリジェンスや軍事戦略などを学
べばよいのかと考えると、あまり学ぶ気も起きないし、それ
は少し違う気がしました。ならば私は何を自分の問題として
とらえるのかと考えましたとき、やはり、教育であると思
いました。自分自身教師になりたいと思っていますし、「人
の心」というものをずっと考えていきたいと思っています。

師の君は感嘆されつつ人麻呂の枕詞を語り給ひぬ

師のやうに古人のひと言に感じ入る我となりたく思ふ

理解を拒んでいたことに気付いた

(都留文科大學 文 一年 神保江里子)

私は、天皇・皇后陛下や皇室を敬っている人に対して疑問
を持つていた。どうして同じ人間なのに、同じ人間じゃない
ように「すばらしい」と誉め讃えるのだろうか。そして、そ
れを理解しようとしていなかった。拒んでいたのだと思う。
正直、講義の中で「なんだか素直に受け入れられない」と思っ
て、重い気持ちになったものもあった。熱く語られると、少
し怖いと思ってしまった。しかし、それより、参加したこと
で知ることができたことや、心にじいんと来た話の方が、何十
倍も多い。それに、受け入れられないからこそ天皇家や、歴
史について、考えの筋道を自分の中で築きたいと思えた。御

製一首一首にある背景を知っていきたいという思いが自然と芽生えた。

班別討論にて

夏空のもとに出会ひし友どちと語り合ひけりわかりあふまで

小柳左門先生のご講義を拝聴して

師の君のやさしく語ります日本のことがこころにしみてゆきけり

自分と日本の歴史が「つながった」感動

（九州女子大学 家政 三年 松浦成美）

様々な感動したことはありますが、一番は、自分と日本の歴史が繋がった感動が大きかったように思います。先生方のご講義のおかげで私は柿本人麻呂に、昭和天皇に、橋本左内の心に自らの心をつなげていくことができました。美しい枕詞に感動し、国民を思われる御製に感動しました。この今回たくさん感じた感動が「つながり」なのかなと思いました。

このつながりを、自分で終わらせたくないという気持ちも芽生えたように思います。私は、先生たちのおかげでつながりを感じましたが、このつながりは、つなげる人がいないとつながっていかないものだと思います。まだ、どのように伝えるなど具体的なことは無いですが、まずは合宿に来れなかった後輩に伝えたいです。

師の君の熱き歴史への感激が胸に入りきて涙溢るる

師の君の想ひ溢るるお話は歴史とつながる橋になるかな

カメラ・レポート10



『柿本人麻呂』と題して、昭和音楽大学名誉教授・國武忠彦先生は人麻呂の長歌などを紹介され、「私達は過去から力を貰ってゐる存在である。古典を読むと今を思って力が湧いて来る。私達も日本の歴史の連続性を心して生きなければならぬ」と語られた。

「最後の班別研修」

初めこそ話はづまぬ時あれど今では時間の足りぬと思ふ

友達とそれぞれ想ひを語る時仲の深まり感じて嬉し

小柳左門先生が涙ながらに御製を読む姿に感動

(中村学園大学 人間発達 二年 古川麻衣)

今まで私は天皇家バンザイとは思っていません、それでも今上天皇については、テレビでも拝見でき訪問の様子や言葉も聞けるのでとてもいい方だなと思っていました。また皇后さまも病院訪問されていたのですごく熱心で思いやりのある暖かい人だなと思っていました。ただ、昭和天皇については戦争中の方だったのであまりよく思っていないませんでした。戦争後どういう行いをされたか知らず、私が生まれる何年前かに亡くなられて、昭和天皇について何も知らず勝手なイメージを持っていました。しかし、今回の小柳左門先生の講義で今まで持っていたイメージがなくなり、昭和天皇は民を思っていたけど戦争をやるのが止められなかったのではと思います。班別研修で資料を読み合い、御製を読むことで天皇の正直というか真心を感じる事ができました。その中で、一番感動したのは小柳先生が涙ながらに御製を読む姿や実際に訪問された文章を読んだ時です。講義中も涙があふれそうになったり、班別研修で感想を言っている時にも涙声になってしまいました。その時の映像が浮かんで、こらえきれませ

んでした。今回こんな貴重な体験ができてよかったです。

小柳左門先生のご講義

近くにていつも優しく導きます師のお姿を遠く拝しぬ

何をするか知らずに参加した合宿

(九州大学 農 二年 竹中千裕)

合宿を終えた今は、参加してよかったと感じています。まず、どの先生も私たちに語りかけようという情熱を持っていて、貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。同じ班になったメンバーは、班別討論においては自分の言葉にじつと耳を傾けてくれました。考えていることを素直に話してくれました。そうやって過ごしていく中で、自分の振る舞い、考えと他人の振る舞いを見つつ、まだ自分は未熟だと痛感しました。

日常生活における勉強や、周囲との繋がりの中でもっと成長し、自分の持てるものの中に誰かに役立つ善いものを少しでも作り生かしたいという目標ができました。皆様、ありがとうございました。

合宿全体を通して

学ぶとは何のためかと考へて目標定めし誰かのためと

本当の国際政治は日本では学べない

(亜細亜大学 三年 三輪夏美)

私は国際関係学科で三年間勉強してきて、後期には国際政治学という授業を履修しようとしているのですが、中西輝政先生が「本当の国際政治は日本では学べない」と、おっしゃられて、今現在も、「では、私が学んできたことは、また、これから学ぶことは何なのか」と混乱しています。確かに私がかこれから習うことはほぼ概論に近いものなかもしれませんが、私は亜細亜大学で国際政治学の授業から何が学べるのかをもう一度考え直さなければならぬと思います。

また、短歌を考えると、昨年はまず何が感動したのかすらよく分からないと思っていて、やつとひねり出し、文語表現じゃなく、それを三十一文字に入れる・・・という流れだったのですが、今年は感動したことがすつと言葉にできて(そこから三十一字にするのが難問だったのですが)、そこが二度目の合宿で成長したなと感じたところでした。また来年も来ようと思います。

阿蘇火口登山へ向ふバスの中で

車窓より覗きし阿蘇の山々に友と見つけし緑の爪跡

國武忠彦先生の講義を聞きて

古くより伝はり来たる歌の道つらなりわれも歩みゆきたし



合宿三日目。『歴史の玉の緒』と題し国立病院機構都城病院長・小柳左門先生は「『玉』とはわが国の歴史の中で輝きを放つ偉人の生き方。『緒』とは玉を繋ぐ命」と述べられ、「和を以て貴しと為し」の“和”こそ国民が失ってはならない大切なものと聖徳太子がお示し下さったものと述べられた。

天皇制度に対する自分の見方が変わった

(北海道大学 水産 四年 河田麻帆)

私がこの合宿で得たものはたくさんありますが、中でも一番の収穫は、天皇制度に対する自分の見方が変わったことです。合宿の前までは、私は天皇制度について特に反感があつたわけではありませんが、天皇陛下を神の子としてあがめたまつることに疑問を持つていました。小柳左門先生の講義にて「昭和天皇ご自身は尊ばれたいなどとは思つておらず、もつと民と共に生きていたい」という話を聞いたとき、天皇も一人の人間なのだと思ひ、親近感がわきました。また因通寺に行幸された時の話を聞いている時は、もし周りに誰もいなければ私は声をあげてわんわん泣きたかつたと思うくらい感動しました。私は、神話はあくまで神話だとは思いませんが、辞めたくても辞めることができない中で天皇として生きているということと考えると、一人の人間として歴代の天皇を尊敬する気持ちが芽生えました。何故「国民の象徴」なのか、少しわかつた気がします。

四日間共に過せし友どちといつか会はむと別れゆくなり

第十二班—女子学生—

日本の言葉の美しさを実感

(中村学園大学 人間発達 二年 久富玲奈)

今回の合宿は初めての参加でした。参加するきっかけも校の先生から行くように言われ、期待と不安を抱いたまま、この阿蘇の地に着きました。初日、先生方の御講義を聞き、その後の班別研修で、同じくらいの世代の人が自分の意見を持つていることに圧倒され、うまく自分の意見を言うことが出来ませんでした。第一日目の御講義で「独りよがりの考えを戒め、本音で言葉を交わすこと。」について藤新成信先生が仰つていた御講義を聞き、初日、うまく自分が意見を言えなかつたことを反省し、二日目からは講義を聞くときは疑問を持つて、しっかり考えることができました。班別研修で様々な視点から見たりするどい意見に刺激を受け、この四日間はずごく成長できたと思います。

御講義の中で國武忠彦先生の柿本人麻呂の話が一番印象に残つていて、今まではいらないと学校で習つてきた枕詞を先生は「素晴らしい。分らないけどきれいな言葉だ」という姿にとても驚きました。枕詞に今回初めて焦点をあて、日本の言葉は本当に美しいものだと思ひました。それを知らなかつた私は大変もつたないと思ひました。今回を期に文学

に対して大変興味を持つようになりましたし、本当に自分にとって良い刺激になりました。また、大学では感じることでできない感動をこの合宿の講義で、参加した方々と感じることでできました。ここで感じたことを忘れず、もつと日本のこと、文学、様々なことを学んでいきたいと思えます。

短かしと思へるほどに充実し学びしことは玉なりけり

日本、皇室をお守りできる一人になっていきたい

（日本青年協議会 三萩 祥 26歳）

今回、まず心に残ったのは、元寇の話だった。負けそうだったところを神風に助けられたと聞いていたが、竹崎秀長や菊池武房など、元軍に勇敢に立ち向かった人がいた事に嬉しさを感じた。当時の方が遺した文章が残っているにも関わらず、それが正確に伝わっていないばかりか後から手を加えられた絵が有名になっている事は、由々しきことだと思う。

そしてもう一つ、國武忠彦先生の柿本人麻呂のお話が印象的だった。枕詞には神のいのちが宿っているという事と、人麻呂の歌が万葉集の約一割を占めているという事だった。明治天皇は日露戦争中に最も多く御製をお詠みになっているが、人麻呂が生きた時代も、それは大変な時だったのではないかと思っただ。

最初の主催者挨拶の中で上村和男理事長が「歴史や文化を実感しながら創造すること」「自分の進むべき道、志は何か」



班別研修。講義で感じたことなどを語り合ふ学生たち。

と話されたが、これまで知らなかった先人の生き様に触れ、その苦悩をお偲びすることで、多くの先人のいのちの上に今、自分があることに改めて気付かされた。先人が守ろうとされた日本をより知っていくことで、私も日本を、皇室をお守りできる一人になつていきたい。

人麻呂の歌覚えむと班皆で声を合せて幾度もよむ

班員しんべんと覚えしことは合宿のよき思ひ出の一つになりぬ

人を感動させる日本語は、すばらしい歴史の一部

(中央大学 総合政策 三年 大小田紗和子)

今回の合宿で感じたことは二点、歴史を学ぶことの大切さと日本語の持つ美しさです。

「どうして勉強しなければいけないのか。」アルバイトの塾講師として小・中学生に国語や社会を教えていると、よく生徒が私に投げかけてきます。この質問の答えが志賀建一郎先生の御講義中で仰られていた「歴史の連続性の中にあつて初めて個人が生まれる」という言葉に含まれているのではないかと思います。中学校の部活動を一心不乱に頑張った理由は、「先輩や学校が築きあげた部」を守り抜きたいということに思い返せばいきつきます。このように、日本の歴史を学ぶ中で、先人たちが築いてきた日本の中に生まれた日本人の私の「コ」が確立されるのだと感じました。

また、私にとって馴染みのない和歌に触れる機会がたくさ

んありました。國武忠彦先生が読まれた柿本人麻呂の長歌、小柳左門先生の御講義の中に出てきた天皇の御製など、その他多くの歌を聴き、読み感じた事は日本語の持つ「力」でした。五・七・五・七・七。たったこの言葉だけで表現し、人を感動させることができる日本語は、私たち日本の国のすばらしい歴史の一部だと思います。

これから日本人として言葉を含め、歴史を学び「個人」「弧」ではなく、「コ」となれるよう、日々精進していきたいと強く思いました。

先人の和歌を学びて思ひたるいと美しき日本の言の葉

自分の気持ちを正確に伝える難しさ

(筑紫女学園大学 文 四年 井崎恵美)

私はこの合宿に和歌を学び深めたいと思つて参加した。合宿導入講義での「正確に聞き取り、読み取り、そして表現すること」という言葉が心に残り、合宿を通して目標にしてゆこうと思いました。短歌の相互批評では表現できたと思つた自分の感動が班員には違つて受け取られ、他者の目を意識させられました。「正確に自分の気持ちを表現し、伝えること」は難しいと思いました。山口秀範先生のご講話で、志は人や世の中とつながり合うなかに育まれていくべきと言われていました。が、ふり返つてみて、私自身、和歌でも、言葉でも心に正確に表現をしたと思つていたのは、人とつながりたい、

かけ橋をかけたいとこの切実な願いの発露だったと気づかせていただきました。

他の人とながりがたしとの自らの切なる願ひに気づきゆく吾は

日本人は「歌」で言葉を鍛えてきた

(九州女子大学 小野香美)

今回の合宿では、まず「本音で言葉を交すことがなければ、人と人が繋がりが合う力にはなりません」ということが心に残りました。「人と人との繋がりは単なる言葉の交し合いではなく、心を開いて本音でなければできないのだ」ということに驚きがありました。この「本音」とはどういうことだろうかと考えたときに、それはうそ偽りのないことではないかと思いました。自分の気持ちをごまかさず、うそ偽りなく言葉に表し交し合うことで人と人との繋がっていくのだと考えたと、日本人が短歌創作によって、その人と繋がる言葉を鍛えていたことが思われてきました。

夜の集ひの出し物に向けて

くり返しくり返し言ひてもだちと人麻呂の歌覚えゆきたり

得難い経験をした

(長崎大学 教育 一年 浜崎 愛)

私は日本人として生まれ、日本に住んでいるのにもかかわ



会員発表。インターナショナルリスクリミテッド・伊藤俊介氏は、企業での経験を基にビジネスインテリジェンスについて語り、「将来はビジネスインテリジェンスを通して国益に関する分野で貢献できるやうになりたい」と決意を述べた。

第二十一班 社会人

志が強められた

らず、日本を築き上げた先人のことを知らないばかりか、知ろう、学ぼうという意識が欠如していました。今回の講義で一番心に残っているのは、小柳左門先生による「歴史の玉の緒」でした。また、天皇についてまったく理解していませんでしたが、御製を拝誦し、少し考えが変わりました。合宿に参加しなければ決して思うことのないことであると感謝しています。

顔合せ友は語らふおのが意を我は黙りて言葉に出来ず

日本人で良かった

(佐賀大学 文化教育 三年 吉本朋代)

今回合宿に参加させていただき、自分が日本人で良かったと今まで以上に実感することが出来、非常に嬉しく思います。先人達の国を深く思う心が、現代の私達の心をこんなに強く動かし、その精神がまた次の世代へと受け継がれていくというところに歴史の連続性を感じました。自分がこうして日本に生きることが出来るのも多くの先人達の努力や思い、そして命をかけたドラマがあったからこそであると感じ、「歴史の玉の緒」の御講義を聞いていたときには、自然と涙が出て来たことに自分でも驚きました。

有難き先生方の御講義に己の未熟さ思ひ知りたり

先人の深き思ひを受け継ぎて日本の歴史に我も続かむ

(株)寺子屋モデル受講生 光成英正 61歳
今回の合宿教室に参加して強く「志」をもつことができた。関係の皆様には感謝しております。
私は折尾愛真短期大学を今春定年退職し(株)寺子屋モデルの寺子屋先生養成講座を受講し、地域での偉人伝を語る活動をやり始めたところです。

今夏学童保育(小学生)教室で低学年の子供らにお手本となる偉人の生き方、言葉、道歌、短歌等を語りました。三十五年以上高校や短大等で教えてきた私にとりまして従来とは異なる体験となっております。そしてそれは私にこれからの人生における目標「志」を与えてくれました。今回の合宿では、特に小柳左門先生がご講義下さった中の「捨身詞虎の図」にて改めて意味を知り、日本人の心の源として歴史の底に流れていることを知りました。私の中にバラバラな歴史の断片が一つになり、天皇様がその中心にあることの喜び、誇り、有難さを感じました。今後私が「寺子屋」活動をする「志」を強められました、本当にありがとうございます。

この国に生まれしことのありがたき歴史の連に大君を保つ

やはり来て良かった。来年も来よう

(株)ハウインターナショナル 祝原正典 23歳

今回で二回目の参加となりました。昨年はほぼ強制的に来たのですが、合宿が終るところにはもの寂しさが込上げてきて「来年も来よう」という気持ちになりました。しかし、月日というのは想いを薄れさせるもので、今回の合宿にはお金もかかるし、時間もかかるから行かないでおこうかと考えておりました。ですが、思ったのは「やはり来て良かった。来年も来よう」という想いでした。

今回も数多くのご講義を著名な先生方にお聞きかせ頂いたのですが、その中でも特に心に残ったのが、「学問の目的」という内容でした。私も今まで「自己開発のため」「人間形成のため」に学んできましたが、それは結局のところ「自分のため」の学習だということに気付かされました。学び、その学を何に使うか、これが最も重要だと思いました。先人の智恵を自分だけのものにするのではなく、その思いと共に後に続くものに伝えていく必要があると思います。まだ至らぬ私ですが、これからは学びつつ、他人にも少しづつ伝えていきます。

班別短歌相互批評にて

歌を詠み批評を述ぶる益友の厳しき言葉に真心を見ぬ

最終日

友達と語りし部屋を共に清め去りゆく時の寂しかりけり



創作短歌全体批評。東洋紡績(株)・庭本秀一郎先生は、明治天皇御製を拝誦されて「『良い歌』とは真心の伝はる歌である」と説かれ、合宿参加者の短歌を取り上げて短歌創作のポイントや添削のポイントを丁寧にご指導された。

「大和魂」を私達一人一人が強く持つことが大事

(ジット株 鷹野竜一 46歳)

今回、初めて国民文化研究会主催の全国学生青年合宿教室に参加させて頂きました。どんな合宿、研修なのかと思っていました。日本の歴史を通して、今現在私達がこうして何不自由なく日本人として居られる事に感謝し、先人の功徳の偉業を改めて知ることができました。そして、この合宿を通して一番強く感じた事は「スピリット」日本人としての「大和魂」を私達一人一人が強く持ち、先人に恥じない行動をして世界のトップの日本になる為にそれぞれの日本人としての使命を果たす事だと感じました。志とは夢を持つ事だと思いません。夢はより具体的にビジョンとして持つこと、そして絶対に諦めないこと、諦めなければ必ず夢は叶います。私も二十六才で会社を興しましたが、夢、目標を具体化して、その為の一つ一つ進んできました。今の学生にも、もっともっと夢を持ってもらいたい叶えることが日本を再び元気にすることだと思います。三泊四日の合宿本当にありがとうございました。合宿で祖国の歴史を聴きたれば祖先の偉業に心打たれり

日本の心を引継がなければ

(菊根本山宝満堂 山下和彦 40歳)

合宿教室にご縁を頂きありがとうございました。参加をさ

せて頂き、一番思ったことは、日本人としてどう生きていくか、どのように生きていかなければならないかということでした。

歴史の連続性の中でやはりその中の一人として考えなければならぬと感じ、また、古典における味わいなど祖先が伝えてきた日本の心を引継がなければならぬと思う。

人と人と語り合うことで心を開き、心同じく日本のため、人のため、働かせて頂けると感じております。

来年も参加させて頂き、今回の仲間とまた会えることを楽しみにさせて頂きます。

皆様ありがとうございました。

月の夜の慰霊のまつりに参列し祖先の思ひありがたきなり

この合宿でしか得られないもの

(株ワイドレジャー 澤島 尚 31歳)

本合宿で学んだ最大のものは「班別研修」の重要さや「輪読」、「短歌相互批評」の大切さでした。今迄は自分で本を購入し、あるいはテレビなどで勉強したことや学んだことを自分の理解に留めていました。そこに留まらず他人と意見を交換する、あるいは他人の意見を聴くことの重要性は本合宿のような場でしか得られないと感じました。今後は独自の勉強のみならず勉強会というものに参加して行きたいと思えます。合宿で幾多の講義を頂き心に残れる大和魂

友達と意見を交すこの時間理解の深まり気持ち充ちたり

参加者全員で「故郷」を唄った瞬間に何とも言えぬ心地良さを感じた

(株九州リースサービス 近藤正和 28歳)

本合宿に参加しまして心に残ったキーワードがあります。

それは、数々の御講義、御話の中に登場しました「歴史の連続性」というものです。一千年以上も前の時代から存在した「日本人としての心」が我々が生きている現在においても脈々と引継がれているという素晴らしさにその凄みを思い知らされました。特に合宿三日目の「夜の集ひ」にて参加者全員で「故郷」を唄った瞬間に何とも言えぬ心地良さを感じたことは非常に良い思い出であります。

但し、「歴史の連続性」ということに関して言えば今回の合宿で学んだ美しく力強い部分がある反面暗く重い部分があることも忘れてはならないと感じました。現在の日本が非常に危険な状況にあるという事実は正に「歴史の連続性」が途切れつつあるだけでなく、負の「連続性」がどこからか存在してきたからだと思うからです。その二つの「連続性」について学び、考えることこそが、これからの日本に必要なだと思います。今回は合宿に参加させて頂き、誠にありがとうございました。

合宿で先人たちの心知り我等の祖国を誇りに思ふ



班別による短歌相互批評。歌を詠んだ班員一人一人の気持ちに向きあひつつ、皆で短歌を添削していく。

私達の代で途切れさせることは絶対にできない

(株)クリーンマツト長崎支店 川原大介 37歳

歴史や古文が苦手な私には今回のスケジュール等が郵送で届き、確認した際苦痛の一言でした。現在営業の仕事をしていますが、五年先十年先を見据えた「未来」というものを重視してきました。覚悟を決め合宿に参加しスタートしましたが、まず導入講義で利より義という話をお聞きし、常に会社で教えられてきた損得より善意という教えと似た部分があり、また、何千年も前から日本人の心の中に存在するものだと実感し、少しずつ歴史の中に入っていく事ができました。

歴史の連続性というお話が何度となく出てきましたが、今回学んでいく中でこれまで何十年と語り継がれてきた歴史、文化を私達の代で途切れさせることは絶対にできない、次の世代へ語り継ぐ為にはこれから知識をつけていかなければ、ないと実感致しました。次いつ参加できるかわかりませんが、自分なりに少しずつ勉強していきます。ありがとうございます。

幾年も受け継がれこしこの文化我らが代も引継ぎゆかむ

天皇様が国民を慈しまれてきた歴史の連続性

(アサヒ飲料(株) 澤部和道 36歳)

小柳左門先生の御講義の中で山背大兄王の御最期(日本書

紀卷二十四)の一文で紹介された言葉に目がとまった。

その時、一瞬にして今までのわだかまりが紐解けた気がした。

私はこの合宿に学生の時に参加して以来、ずっと「天皇」の御存在というものが知解に留まり、心解まで至っていなかった。そのことは自分に嘘をついても仕方ないことなので御製を詠むことを心がけながら、常に気持ちの奥底で眠らせてきた。ところが、日本書紀の中に天皇家が「百姓」を「おほみたから」と呼びになっていたことを知り、歴史の連続性の中で「天皇」は日本民族の祭司として「国民」を慈しまれ、「国民」はごく自然にそのような天皇様に崇敬の念をもつてきた、そういう関係性が当たり前のものとして非常にしっくりと心に沁みてきたのである。

国民を「おほみたから」と天皇の呼ばれしことのありがたきかな

再発見の場となる事が確実に期待しうるこの合宿教室

(羽後信用金庫石脇支店 須田清文 55歳)

二十二年振りに再会した学生時代の同期の友と会ひ、久しぶりに語りあつて、その充実した精神生活を垣間見ることができ、自分自身の明日からの生活の力点について考へさせられた。

「人間の部分を統一するものであるところの」スピリットを持って」といふ小田村寅二郎先生の言葉は私の心を洗ってく

れるやうだ。「生命的な燃焼」の体験となつていく生活を指していききたい。

合宿教室はひとりひとりの力と伝統的力の総合的威力によつて自分自身の内面を見つめ直さしめられる。困難はあまた待ちうけてゐるであらうが、参加者ひとりひとりの自身の再発見の場となることが確実に期待しうるこの合宿教室は本当に有難い修行の場と思ふ。継続の重要性がますます増してゐると思はれる。ありがたう存じました。

慰霊祭にて

み友らとなき友しのびつあひまつる齋庭にすぎゆく時しづかなり
今はなき恩師み友らしのびつあひまつりけり阿蘇の齋庭に
み友らとまつる齋庭の空の上に群雲出でて月影あらはる

第二十二班 社会人

「志」を持つこと

（日商保険コンサルティング(株) 橋本安太郎 28歳）
今回初めて参加させていただき、三泊四日みっちり学べ私にとつて大きな財産になりました。

一方で講義を拝聴した時はいつも熱い想いになるもの日常生活に戻ると、すっかり気持ち落ちついてしまいがちになります。山口秀範先生のご講義にもありました通り、「志」

カメラ・レポート 16



慰霊祭に先立って元新潟工科大学教授・大岡弘先生より、慰霊祭齋行の趣旨・手順が具体的に説明された。そして慰霊祭とは「豊かな日本の文化に浴することが出来る幸せを祖先のみ霊に感謝申し上げ、続く者として自らの決意を固める祭りである」と述べられた。

を持つことで気持ち維持したいと思えます。

また非常に優秀な学生さんが多く参加されているのに驚かされました。是非とも広い視野を持って、時には国文研の先生方のおっしゃることについても疑いの目を持って臨んで欲しいと思います。色々な考えを取り入れる柔軟さと、動じない思いを持って他人の意見を尊重できる人材になつて欲しいと思いました。

火の国に集ひし我らの魂は胸中燃ゆるマクマの如し

歴史の連続性に生きる

(祖福岡県中小企業経営者協会 林 賢吾 33歳)

古くから連綿と受け継がれてきた日本の文化・伝統は古事記などにより当時を偲ぶことが出来ます。大東亜戦争以後の情報操作によつて分断され、また文明が発達したことも影響があるとは思いますが、古き良き日本が失われつつあることを悲しく思います。短歌創作や柿本人麻呂の話、元寇の実像の話、歴史の玉の緒の話聞き、失われた日本を再認識し、日本人としての心ある日本人に戻りたいと思われてきました。中西輝政先生の「この国はどこへ行くのか」では、現在の日本が置かれている立地、中国の本当の所の脅威、日米関係の本当のところ、日本にナシヨナリズムを主とした政党がない理由等きわどいお話を拝聴し、認識の甘さを痛感しました。

失はれし歴史の断裂繕ひて国土に戻れ日本の心

先生方の熱いお話

(内田喜章 38歳)

初めて参加させて頂いたこの合宿で祖国日本を想うたくさんの方々とお会いすることが出来て、本当にうれしく思いました。中西輝政先生のご講義はもちろんのこと国文研の先生方の熱いお話の数々に心より深く感動させられ、これからの自分の人生についてもっと研鑽を積んでいきたいと思えました。

次の世代、またその次の世代の日本人が今よりもっともつとこの麗しい日本の文化、歴史、伝統を引き継いで行ける様に、残りの人生を強く生きていきたいと誓いを新たにしました。四日間学び合ひつつ日の本の未来を創る^{まなぶ}学舎なりけり

生きていく指針を頂いた

(航空自衛隊 村山健司 42歳)

諸先生方の講義はどれも心打たれるものであったが、特に中西輝政先生と小柳左門先生からは、今後自分が生きていく上での指針を頂けた御講義であったと感謝している。

中西先生からは、自衛官という仕事をやっていく上で「日本を守る」という当たり前のことについて自分はこれまで非常に軽く甘く考えていたことを深く反省し、今後より一層高

い志、日本人としての誇りを持って勤務していかねばならないことを学んだ。小柳先生からは昭和天皇が戦中戦後に詠まれた御製を丁寧に教えていただき脈々と続く日本の歴史、日本の連続性を学んだ。配付資料の「天皇様が泣いてござった」は涙があふれて仕方なかった。合宿で得たことを今後も継続して自分の生活に生かしていく所存である。

故郷福岡県北九州市の祭事戸畑祇園大山笠の思はれて

合宿の夜の集ひに共に唱ふ「故郷」の調べに心安らぐ

故郷の大山笠の目に浮かび伝統文化の礎想ふ

日本の伝統文化を守るべく心を磨き職をつくさむ

感動的な御講義

(若築建設(株)九州支店 池松伸典 54歳)

とても素晴らしい合宿であった。招聘講師の中西輝政先生をはじめ国文研の各々の先生方が全身全霊を込めて語られた感動的な御講義を聴かせて頂き有難く思ふ。

日本の現状がかくまで危機的状況にあるのかと、それまで漠然と過ごしてゐた自分に対し、現実の姿を直に突きつけられた様に感じる。新しい日本人を育てていく一助として微力ながらも若い学生と語り合ひ、共に研鑽を積んでいくことを進めていきたい。

思ひ込め語りゆかるるご講義に涙もよほすこと多かりし
つたなかる身にはあれども志励まし合ひつつ学びゆきたし



慰霊祭。満点の星の下、亡き師亡き友を偲び、合宿参加者全員で『海ゆかば』を奉唱した。

公のための自己犠牲のお話

(福岡大学経済学部教授 阿比留正弘 57歳)

今回の合宿で最も大きな収穫は小柳左門先生の自己犠牲のお話でした。たまたま最近アメリカの学者(インド出身)とお話の中で、ヒンズー教では七つ目のチャクラがエネルギーの源泉として知られていることを聞き、中でも最も大きなエネルギーの源が「公のための自己犠牲」であることを知りとても気にかかっていました。この合宿で小柳先生の話聞き、この内容をもっと深く学びたいと思いましたし、同時に七つ目のチャクラについて深く学んでみたいと思います。今後の学習のきっかけを与えてもらい参加してよかったですと思いました。

また私の教え子たちが、この合宿で輝いていたことを嬉しく思いました。

公けに捧ぐる我が身は喜びと知りし感動述べ伝へたし

亡母のことを思う

(きまぐれ書房 店主 大内保治 61歳)

前回の阿蘇合宿ではまだ産経新聞が九州で現地印刷を行っていないかったため、合宿期間中、産経新聞を読むことが出来なかったが、今年からは九州で印刷されるようになり、朝新聞が届いた時は感無量でした。

小生江田島合宿での初参加以来今回で八回目の参加です。昨年母を亡くし、会社(産経新聞社)も一昨年定年で辞め、只今無職、六十一才の年金生活者です。今年夏より当面の間目録販売のみとなりますが、古本屋を開業いたしました。敗戦後GHQに押しつけられた3Sではなく、我々の3S(書籍・書棚・書齋)を取り戻し、町には豆腐屋、居酒屋、そして必ず古本屋があつてほしいものです。

新盆に帰省し実家に泊まりて

夏の夜に遙かかなたで虫が鳴き夢の中にて亡母の声聴く

昭和二十年五月防空壕の中で生まれた姉とともに八月十五日

靖国神社に昇殿参拝して

おごそかに夏の靖國蟬が鳴く姉の顔みて亡母を偲びぬ

新しい保育活動の実践

(すずかけ台保育園 園長 平野正憲 63歳)

私は保育園を昭和五十五年四月より経営しており、このお子さん方のご家族方が「安心して仕事が出来、かつ子育てが出来よう支援をし、かつ健全育成が出来よう『養護と教育』をする」ことを使命としています。園児達に何を教えるか、これから先どういう思想、信条で保育活動の実践を為してゆくかが問われています。ここに貴会が示されておられます「日本および日本人の歴史・伝統・文化、更には行動・立居振舞い、敷島の道」等を基底とする考え方を理解し経験

を積み重ねてゆき取り入れていきたいと思い、今回小生他2名の若手職員も参加しました。「歴史の玉の緒」「持続する志」「新しい日本人」等、私にとって新しい実践の為の「考えるヒント」を頂きました。今後でも実践してゆきたいと存じます。先人の教へを諭す先生の涙の言葉に我も涙す

中西輝政先生の貴重なお話

（國學院大學 特別研究生 大岡 弘 63歳）

良質の質問に誘発された中西輝政先生のお話はすごかった。我が国には各国の秘密工作員が多数あて、全ての情報が盗まれてゐるためもうスパイ天国ではなくなつてゐるが、依然工作天国である。日中関係もこわいが、日米関係はさらにおそろしい関係である。九条改正までは米国依存はやむをえない等、「新しい日本人」による保守党の出現さへ実現が困難な現況を、詳しく語っていただいた。貴重なお話であつた。

ありし日の警蹕けいひつのみ声よみがへり導き給ひし大人おとなの偲しのばる



夜の集ひ。班別で余興を披露し、楽しいひと時を過ごした。

心の芯を太くして頂いた

(翁)根本山宝満堂 平川秀隆 28歳

今回このような素晴らしい合宿に参加させて頂き誠にありがとうございました。参加した当初の目的は、松下村塾のような幕末の志士達が受けたような教えを自分も受け、志を大きく持てる人間になりたい、あるいは、そこに集まる志ある人と縁を繋ぎたいという思いからでした。日に日に道徳の低下した日本を祖先の方々に恥じない日本にしたいと強く思うようになり、まさにこれ以上にならないタイミングでした。

しかし、僕の心は反面、昔の人はあんなに素晴らしいのにと、今の日本をあまりにも蔑んでおりました。そんな時、小柳左門先生の講義を受けまして、日本の原点である聖徳太子の素晴らしさ、そして、その心が脈々と今上天皇まで伝わっている事を教えて頂きました。国のトップにこんなお方がおられる日本という国はなんと素晴らしき事であるか、またそこに生まれた自分はなんと幸せであるか、心が温かくなり思わず涙が出ました。そして臣民として、国の為祖先の為に生きていくという心の芯を太くして頂いたような気がいたしました。

必ずまた参加させて頂きたいと思えます。

小柳左門先生のご講義を拝聴して

おほきみの民への思ひ知るときに頬を伝ひて涙流るる

心への響きを感じた

(妣)福岡県中小企業経営者協会 神代真宏 34歳

この研修において一貫して感じた事は心への響きではないでしょうか。過去の偉人の歴史を知り、その時の彼らの思いを知るといふ事は、現在の自分に対し「おまえ、何やってるんだ」と怒鳴られている気がします。これこそが心への響きではないでしょうか。

今回いろいろとお世話していただいたスタッフの皆さま並びに講義して頂いた講師の方々に深く感謝しております。ありがとうございました。

班別研修にて

先人の思ひを胸に持ち帰り友と語らひ凜となりけり

一番印象に残った「歴史の玉の緒」

(妣)ワイドレジャー 林 和宏 38歳

充実した四日間を過ごせ、最高のロケーションで勉強が出来ました。どの先生方の講義も引きつけられる内容でしたが、一番印象に残ったのは「歴史の玉の緒」でした。学ぶ機会が少ない天皇さまのお心や、玉虫の厨子に描かれたような国民

のために命を捧げられるご精神。これが昔から今まで引継がれている事を終戦時の御製によって教えて頂きました。自分の身はどうなってもいい。国民を助けて欲しいという天皇のお心のなんと素晴らしく、ありがたいことかと思いました。

また、講義において、先人が残してくれた宝。日本人にしか味わうことの出来ない短歌によって今と昔が繋がりが、歴史は途切れる事なく繋がっていることを学ばせて頂きました。

最後に今回研修に参加させて頂いた会社に感謝し、自分が出来得る良い文化・伝統を伝えていきたいと思えます。

よき文化よき伝統を新しき日本人となりて子孫へ残す

「日本」のことを何も知らなかった

(株)ジットセレモニー 木本正彦 46歳

日本のことを知っているようで全く知らなかった。知っているつもりで四十六年間生きてきたことがはずかしく、また、日本を支えてきてくれた方々、命を捧げて日本を守ってくれた方々および自分の先祖に対して申し訳ない気持ちで一杯になりました。過去に戻ることは出来ないけれどもこの合宿で気づいたことをもつともつと自分で学び、自分で考え、自分のものとして、心に残し、行動していきたい。

国のこと何も知らずにはづかしくもつと学んでつなげていきたい

カメラ・レポート19



合宿四日目。(株)寺子屋モデル社長・山口秀範先生は『持続する志一橋本左内『啓発録』に学ぶ』と題し、「合宿を通して皆さんの胸中に沸々と湧いてきた思ひを『志』といひたい。この時間は自分の志の立て方を左内の『啓発録』から学びたい」と仰って、講義を進められた。

諸先生の講義内容が素晴らしかった

(大森和弘 57歳)

三回目の参加となりました。今回のプログラム（カリキュラム）が一番良かったと思います。その理由の一つには、この間、私が読書等を通じて得た知識や、その他の活動で経験したことが反映されて合宿での内容をより深く受けとめることができたからと考えられます。もちろん、諸先生方の講義内容が素晴らしかったことは言うまでもありません。

この合宿で知り合った諸先輩からの変らぬ御厚意に与れることの幸を実感しています。

慰霊祭の説明をされた大岡弘先生に感謝して

ご説明名人域に達すまで聴きてゆきたし楽しみにして

御講義に感謝申し上げます

(株はせがわ 長谷川裕一 69歳)

各先生の御講義に心から感謝申し上げます。非力ながらお役に立たせて戴きます。よろしくお願い致します。執行部の先生方にも心から御礼申し上げます。班員の方々に沢山御指導戴きました。

海を越え民族超えてむつびあふ世の来たらむを祈り励まむ

独立の自覚を持つ以外にない

(鳥栖市役所 西山八郎 57歳)

社会人班に参加させていただきましたが、異なる職場での経験を踏まえながら、社会人として、また、一人の日本人としてどう生きていくのか、真剣に議論し合う貴重な機会となりました。また、班員の思いをしっかりと受け止め、自分の考えを正確に伝えるという基本的な姿勢を問い直させられた三日間でした。

中西輝政先生のご講義では、わが国の国際社会における複雑な関係と危機的状況を改めて思い知らされました。現実社会の厳しさに対する鈍感を払拭し、刻一刻と深刻化し、抜き差しならない事態へと進む状況をいかにしたら打破できるのでしょうか。妙案はありませんが、一人一人が気力を奮い立たせて独立の自覚を持つ以外にないと思います。

班別討論

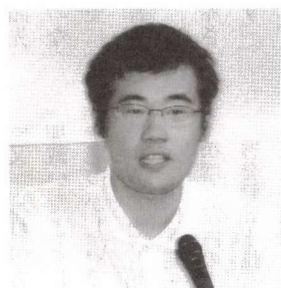
日追ふごとくには変はり行く友の眼差しに身の引き締まる思ひするなり
真剣な友の眼差しに己が身を振り返りつつ思ひ語りぬ

友もまた湧きいづる思ひ伝へむと言葉探しつつ語りたまひぬ

歴史の連続性と日本の国柄の有り難さを感じた

(S I S 株 内田巖彦 64歳)

導入講義で引用された「自他の二境を分かつた」「他と共に



全体感想発表。「日本を守る担ひ手となるバトンを渡された思ひがする」「自分の不勉強を痛感した」「具体的なエピソードを通して国民を思ふ天皇の御心を感じられた」「短歌創作で心持をいかに表現するかといふことで多くのことを学んだ」などの感想を参加者が率直に語った。

なる生」の言葉が合宿期間中頭の中を駆け廻ってゐた。諸先生の講義、輪読を通じて、古典教典は決して独りでは読めない、知り得ないことを気付かされ、祖先を想ふこと、歴史に自己がつながってゐることを実感すること、それがこの深遠なる言葉の意に通ずるものではないかと気付かされた。

私が学生時代にこの合宿で教へを受けた諸先生方が他界されたり、ご高齢で参加されなくなったのは寂しい限りです。しかし、一方では同世代の諸兄が続々と立派な講義をされ、歴史の連続性と日本の国柄の有り難さを今回の合宿ほど感じたことはありません。

師と友の御力いただき古典読む「共なる生」を教はる想ひに
灯消し床のべ窓の外眺むれば蛍飛び交ふ最後の夜に

歴史の玉の緒を学んだ四泊五日

(株)H I エアロスペース 内海勝彦 55歳

今回は小柳左門先生のご講義にあった日本の歴史を貫く「玉の緒」の数々を学ばせて戴き有難かった。講義中に紹介された数学者岡潔先生の「その人々が、ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つ」という強いつながりによって、たがいに結ばれているには、しあわせだと思いませんか。ましてかような美しい歴史を持つくにに生れたことを、うれしいとは思いませんか。」のお言葉をまさに実感できた四泊五日であった。

又、班員の方々には多忙な勤めの中、高い意識を持って参加戴いたことに感謝致します。班長の役目を如何程果たせたか恥づかしいですが、全員この合宿に来てよかつたと思つて戴けたことを嬉しく思つてをります。有難うございました。

山口秀範先生の御講義をお聴きして

松陰と左内の二人獄中に離れてありしとふ奇しき縁よ

啓発録と士規七則の三端の一致せしこと指摘給ひぬ

英雄が英雄を知るとふ先輩は二人の生き様熱く語る

第二十四班—社会人—

連続している歴史を学んだ

(日本和装ホールディングス(株) 早瀬賢治 51歳)

今回初参加ですが、諸先生の講義で忘れかけていた日本の心や本来学ばなくてはならないことを教えていただきました。学校で習つた歴史は出来事だけを覚え、短歌は暗記するだけでそれぞれのつながり、連続しているといったことは考えたこともありませんでした。この体験を今後の自分の人生に生かせたら良いと思います。

「第五十五回合宿教室」の最後に

阿蘇見れば思ひだされむこの合宿自分の進歩感じらるるや

真剣な眼差しに感激した

(古澤万亀生 82歳)

真剣な学生、教授の方々、社会の現場で苦勞なさってゐる社会人の方々の眼差しに感激しました。大いに期待申し上げます。諸先生の講義は何れも立派で、有益であり、その中で中西輝政先生の「この國はどこに行くのか」といふ講義に、眞の歴史を学び、日本の将来を自ら学んで、考へていかなければならないと思ひました。次に小柳左門先生の講義で昭和天皇が国民を案じてくださったってゐた御製を拝し、責任は自分にあるとおっしゃってゐたことを思ひ、また、「天皇さまが泣いてござった」といふ文章を班で讀み心の中で泣きました。来年も楽しみにして居ります。

第五十五回合宿に参加して

阿蘇の地に二日目も過ぎ研修会に参加の悦び日毎に増せり

後輩、家族に伝えていきたい

(株九州リースサービス 是永育洋 35歳)

三泊四日の研修合宿、興味深い話、共感できる話等あり、文化、歴史の大切さを再認識できた面もありました。自分なりに考え、咀嚼して、後輩、家族に伝えてゆきたいと思ひます。

合宿の終りて家路の急がるる楽しみに待つ家族思へば

カメラ・レポート 21



閉会式。主催者を代表し、磯貝保博副理事長は「皆さんの心に疲労感があるのは多くのことに心を遣ったからだと思ふ。ここで学んだことをご家族や友達に是非伝えてほしい。そこから新たな学びが始まる」と挨拶をした。

日本人としての視点で学問をしたい

(山口県立熊毛南高等学校 吉津佑紀 28歳)

合宿が深まるにつれ、これまでの自分の学問は「日本人としてのビジョン」特に「我が国はどうあるべきか」という視点に欠けていたことを直視でき、諸先輩方の深い知識と洞察を前にして、自分もこうなりたいという気持ちを抱くことができた。何のために学ぶのか、それは単なる自己完成ではなく、エゴイズムに陥ることなく、他者、先賢、自国の伝統、文化、歴史の連続性の中に自己を見出し、全体性の中でその成果を還元することという視점에気付いた。この視点を忘れず一層研鑽を積んでいきたい。

学問のかくあるべきを省みて志し新たに深めゆきたし

国歌「君が代」を大声で歌った

(武藤愛尚 25歳)

半ば無理やり参加させられたものですが、開会式で「君が代」が大勢の人に大きな声で歌われているのを見て考えを改めました。今まで「君が代」を歌うというのは単なる儀礼と思っていたからです。

全体感想自由発表にて

壇上に登る我が身の惨めさを恐れず思ひを語りゆきけり

学問の目的を思い知らされた

(株)テクノ・コーポレーション 吉武篤志 39歳)

藤新成信先生が導入講義で「学問の目的」ということにふられた際、学問とは何をするものであるか思い知らされた。その後の各々の講義の中で、古来から我々に脈々と受け継がれているもの、そして、私も含めて、多くの人たちが失いつつあるものについて改めて考えさせられ、この「美しい歴史」を持つ日本を何とかしなければ、そのために個人として何をしなければならぬかについても、また、大変考えさせられました。幸い最終日の山口秀範先生の講義で橋本左内の「啓発録」をご紹介頂き、歩む際の道標を示していただけました。

四日間の講義を聴講する中で

日本史で名を知るのみの人物が心の中で動き始めつ

印象に残った中西輝政先生の御講義

(福岡県中小企業経営者協会 染矢研司 44歳)

三泊四日の研修で多くのことを学びましたが、一番心に残っているのが、中西輝政先生の御講義です。今後先生の著書を読んでいこうと思います。これほど読みたいと思ったことはこれまで経験がありません。また、吉田松陰についても勉強してゆこうと思います。

早朝の阿蘇の草原は清々しく爽やかな風に心洗はる

新しい日本人出でよ

(損害保険料率算出機構 銚 信弘 57歳)

過去合宿教室で掲げられた「二本足で立つ真正なる日本人出でよ」といふテーマがある。一本の足は「我国の歴史、文化、伝統」であり、もう一本の足は「世界」、理論的な学術や科学技術等もしつかり身に付けるといふことであらうか。今回中西輝政先生は、「新しい日本人出でよ」とおっしゃった。江戸時代に興隆した国学の影響を受け「古事記・万葉集」に連なる日本人としての精神文化を身につけた志士達が、幕末の日本の危機に際して、西洋の学術も吸収して開国攘夷を果たしたことは「新しい日本人」の出現であったと説かれた。幕末の志士が担ったテーマは今も変わらず我々一人一人が担ふべきものであらう。

全体意見発表

苦しきも心開けし喜びも語る友らの言葉胸打つ

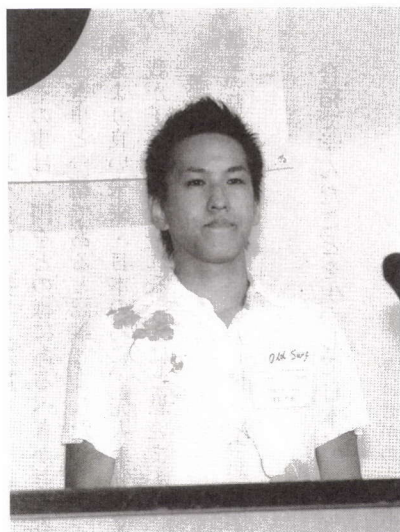
第二十五班—社会人—

職場、家庭を充実させることが国を守る第一歩

(拓殖大学・亜細亜大学講師 山内健生 65歳)

「歴史の玉の緒」とは小柳左門先生の講義題目であったが、

カメラ・レポート 22



「班員と熱く議論を交はすことができ本当に嬉しかった」と九州工業大学3年・大森淳史君(写真右)が挨拶し、学習院大学4年・藤尾允泰君が閉会宣言をして、第55回全国学生青年合宿教室は幕を閉じた(写真左)。

それが本合宿を底流するテーマであった。歴史の連続性の知識もより多く尋ねるべきではあるが、同時にそれを喜びとして自分と一体的に感じとることで日本人としての生命力が湧き出てくると思ふ。これが知的学問の前提であつて、その一体感があつて知識欲は一層増すものと思ふ。

二重三重に歴史の連続性が見えなくさせられてゐる現実を思ふと、また若い参加者の生き生きとした様子を目にする、年長者の責務は本当に重いものがあると痛切に感じた。

社会人班の班付きとして一緒に学んだが、社命での方も、より深く自分自身を顧りみて感じとるものが多かったことと思ふ。日々の職場、家庭をより大切にして充実させることが、国を守る第一歩と感じてゐる。

閉会式

歌声のつよく大きく講堂にひびきわたれり君が代斉唱
研鑽の稔りの大きを語るごと歌声高く講堂に満つ

家族を幸せにする事と国を想う事は同じ

(株)ワイドレジャー 池尻弘貴 29歳

この度、全国青年合宿教室へ参加し、多くの面で自身に収穫がありました。私は十代の頃勉学に務めたのは、受験期間のみで、ましてや、歴史について深く考え知る事などありませんでした。

今回、先生方の講義を聞き、歴史の流れや真実そして、そ

の人物の心情までも手に取るように感じる事ができました。重ねて、私は現在家庭を持ち、家族を幸せにする使命があります。その事は、国をどの様にあるべきか考える事、自分が行うべき事と一緒にであると認識しました。

私もより良い未来・日本の為に、先人たちの文化、志を学び、我が子達へ伝えられるようにと思ひます。

最終日講堂にて

講堂の静かなるなかセミの音を友ら聞きつつ想ひ記すらむ

合宿で学んだことを生かして日本に貢献していきたい

(株)はせがわ 藤田 哲 40歳

今回、初めて参加させていただきましたが、ハードな日程表からマイナ斯的思考での参加でした。

しかし、今振り返って四日間を思いますと充実した日々であったことは間違いありません。弊社では、常に日本について語ったり考えたりしてはいますが、古典、歴史、短歌から日本を捉える機会はなかった為、非常に興味深く学ぶことができました。

また、判別研修では、世代や価値観が違う様々な方と語り合う事ができ、絆を築くことができたと思ひます。

「歴史の連続性」という言葉が、頻繁に出て来ましたが、私の生涯の歴史が流れる中で、今回の合宿で培ったことを活かし、私に何が出来るかを考え、日本に貢献して行きたいと

思います。

最後に国文研の先生、スタッフの皆様、すばらしい合宿を開催して頂き、ありがとうございます。

悟る友日本の未来考へて若き志士達熱く期待す

日本人としてどう生きて行くかの座標軸

(柏原商事(株) 兼深貴史 37歳)

まずは、この合宿を企画、運営して下さった関係者の皆様に御礼申し上げます。

この合宿全体で一貫しております、歴史の継続性の重要性について改めて認識いたしました。また心を開き心を語ることを基礎とし、自らの思ひを伝える和歌の実習では、同じ感情も言葉を少し変えることでも意味の深さ、広がりを見せ、日本語の素晴らしさを身を以て体験致しました。

現在、テレビ、インターネット等莫大な無機質の情報に囲まれる時代だからこそ先人が残して下さった書物に触れることにより、そこから感じとり、知解から心解、そして体解し、日本人としてどう生きて行くかの座標軸の形成をしていかなければならないと思ひました。

自己を形成していく中で、この合宿は良き友にも恵まれ、語らうことで、発見と確認をすることが出来る場所だと思ひますので、機会があれば再びチャレンジしたいと思ひます。

筆置かば友とのわかれ時迫る心の糸は明日へも繋る

真の人間教育ここにあり

(福島義築 62歳)

阿蘇の青い草の下、四日間の合宿教室に参加でき、その縁の深さに感謝します。

諸先生方の熱誠あふるるご講義はその誠に感応し、落涙しはしばの私でした。

山背大兄王が聖徳太子の和の教えを守り、一族諸共滅亡の悲劇は、初めて学んだ史実でしたし、柿本人麻呂の天皇を神と仰ぐ万葉集の深きところに感動しました。彼をして歌聖と言わしめること大首肯しました。

今回はじめて、和歌を詠む機会をえて、人生のステージが一段階上がった気持ちです。また、慰霊祭に参加させて頂き、その神々しさに打たれ得難い経験をさせて頂きました。

真の人間教育ここにありの感が致します。今は過去である(小林秀雄)、竹山道雄先生、村松剛先生の心をこの合宿で学べることは大いなる喜びでした。

神様のおはすみ山のおもとにて合宿教室うれしかりけり

「縦と横の連携」のある合宿教室

(福岡教育連盟 副島賢三 45歳)

今回、短歌創作を通じた「誠」の深究と、志高い皆さんとの交流がはかれたことをうれしく思っております。普段等、

「縦と横の連携」ということを常に心懸け、活動しておりますが、まさに本合宿教室は、各講義が短歌創作、班別活動等によって縦の位置にある日本の歴史、伝統、文化を通じて深く思いをいたすとともに、班員相互の間に、志を同じくする同志との横の交流ができる他にない活動であると思います。

戦前より継承されているこのような活動をぜひ、子々孫々まで続けていって頂きたい。何よりも若い方々が心から思いを述べられていること、心を開かれていること、歴史に謙虚な態度でいらつしやる。そのような教育効果がこの合宿にはあるのだということを実感します。

阿蘇の山今に息づく清流に祥感する時ぞ頼もし

学問いのちに至る道

(日本郵便大村支店郵便課 橋本公明 55歳)

二十五班にお世話になり、有り難うございました。班員の方々はとてもすばらしい、気のつく方ばかりで学ばされる事が多かったです。

学生時代の「学問いのちに至る道」の言葉が、鈍き自分ではありますが、ずっと続いております。今回の合宿で、学問とは難しいことではなく、一つの書物を好きになり、楽しく語りゆく事でも良いのではないかと気付かされました。

深めてゆく事は、繰り返し繰り返しその分の著者の声に耳を傾けてゆく。その声に励まされ、力強く生きて行く。その

事を大事にしてゆきたいと思ひます。

班の皆様、自分の職場で一所懸命、力を尽くしませう。すばらしき友に恵まれ一ときを学び過ごせる日々ぞ尊き

勉強を続けていきたい

(株まるぶん 嵐 隆将 26歳)

私が、この合宿教室で一番感じた事は、自分がまだまだ勉強不足であるということです。

今までは、日本という国に対してもあまり関心を持っていなかったのですが、今回の合宿教室をきっかけにして、札幌に戻っても日本の事や、過去の偉人の事などの勉強を続けていきたいと思ひます。

つとひにてみんなと飲みしあのビール一生忘れぬ味になりけり

第三十一班—女子社会人—

「心」の指標が見つかった

(鶴花園 鶴 比呂子 25歳)

何か小さいものでも「心」の中に指標となるものがつかめれば良いとの思いで参加しました。諸講義でそれぞれの先生方が示してくださいました事は、日本という国の歴史の一つ

一つがバトンリレーの様に引き継がれ、その流れの中に今もあるということ、又、日本人が昔から何よりも大切にしてきた「他人を思ふ心」が、聖徳太子をはじめ、天皇家に代々受け継がれてきた清らかな強く優しい精神（お心）がぶれることなく存在し続けていることを感じさせて頂きました。この先の人生を農業者として、いつか「母」になったときも、日本人としての誇りを持ち他人の為になる生き方をしていきたいと強く思っています。

いと早し阿蘇での日々は終れども我こころには明かりつきたり

両陛下の優しいお心に触れられた

（すずかけ台保育園 有馬夢乃 20歳）

まず、この合宿に参加させて頂きありがとうございました。参加する前は、「どんな事を勉強するのだろうか」と不安で一杯でした。歴史や文学等の勉強がとても苦手なので、私は四日間過ごしていけるのかという不安を持ちつつ部屋に入りました。年上の人ばかりでどうしようかと迷っていると、気安く話しかけて下さり、話をしていくうちに段々と打ち解けることが出来ました。それから、講義内容で分からない所を丁寧に教えて下さったりと日を追うごとに楽しさが増し、初めは「早く終われ」と思っていた合宿も「まだ続け」と思うようになりました。

講義では、天皇・皇后両陛下がお歌いになられた御製を学

ぶ事が出来、今まではただ凄いなと思っていたお方の優しいお心に触れさせて頂きとてもありがたく思いました。今までは興味がないからと避けて来たものにも挑戦して行きたいと思えるようになったのと同時に、日本という国を愛し、自分に何が出来るかを考えて実行していきたいと思えます。

阿蘇の地で共に過ごせし数日は我が永遠の思ひ出なりし

最終日班員皆で夜を更かし太陽昇りてアドレス交換

人麻呂の枕詞の美しき意味教はりて感嘆したり

歴史の連続性の大切さに気付いた

（すずかけ台保育園 田中美里 21歳）

今回初めて合宿に参加させて頂きました。私の勉強不足もあり、難しくあまり理解できなかった部分もあったのですが、貴重な体験をさせて頂きました。

保育園でも、日本の歴史・文化を大事にしており、まずは保育者である自分が勉強をし、歴史・文化を知らなければと思いつきました。先生方の講義を聞いていて、自分の未熟さをとても痛感した四日間でした。

日本の歴史の連続性が大切という事でしたが、改めて昔があるから今があるんだと感じさせられました。また、一人の国民として、歴史であったり、今の政治の現状を知っておくという事はとても大切なことであり、今までの自分の無関心さに気付かされました。今まで何となく見ていたニュースや

新聞ですが、進んで見て行こうと思いました。

昨夜の夜の集いには楽しく参加させて頂き、また、幅広い年齢層の中で、私自身の人との関わりも幅が広がりとでも勉強になりました。ありがとうございました。

四日間阿蘇の地にてのこの出会ひ感謝の思ひあふれくるなり

日本に流れている精神を知った

(株)はせがわ 小山奈都子 28歳

これまでの私はただ単に「何年に」「誰が」「何をした」かのみを丸暗記する歴史教科が苦手で敬遠しておりました。ところが、今回拝聴した御講義はどれも、先人がどのような精神的土台に基づき、どのような考えを持ち行動や書簡等で表したのかを、先生方が熱意を持ち、語って下さり、内容は、初心者には難しかったものの、導かれるようにして理解することができたと思います。特に「捨身飼虎」の話については非常に印象に残っております。この精神を体現されている歴史上の偉人や、代々真に実践しておられる天皇家に支えられて今の日本があることを初めて知ることができました。

班別短歌相互批評にて

我れ初に詠みたる歌を囲みつつ良くせむとする友ありがたし

草千里にて初めて馬に乗りて

おそるおそる背にまたがれば内も温もり感じこはばりゆるむ

侍スピリットを感じた

(翁根本山宝満堂 木ノ内美紀 35歳)

一、講義について、どの講義も素晴らしい内容で大変勉強になりました。国文研の先生方には、豊富な知識とともに、熱い愛国心と信念を感じさせて頂きました。こういう先生方がおられる限り、日本は大丈夫！ぜひ、次世代に情熱と学びを伝え続けて頂きたいと思えます。又、中西輝政先生のように日本の言論の最前線におられる方は、「天才的に頭がいい人」ゆえに言いたいことを堂々とと言える人と思っていました。そこには命を張って道を進んでおられる侍スピリットがあることを感じさせて頂きました。今回先生の生の声を聞かせて頂いたこと、本当にありがたく思います。

先生方の熱い思いを忘れず、日本人としての誇りを確立していく為にも、日本の歴史を今後も学び続け、今回頂いた配布資料や本は大切に使用させて頂きたいと思えます。教える人教えられる人、双方に熱い思いと信頼感を感じました。日本はまだまだ捨てたものではない。新しい日本精神と日本の歴史がこのような集いから始まっていくことを切望しております。

二、スタッフの皆様へ、私も団体の職員として組織体制の素晴らしさに感動しました。これだけの人数を動かしていくには、その裏に大変なお働きがあられると思います。お蔭様で学びと交流に集中することができました。これからも頑

張つて下さい。どうもありがとうございました。キャンプファイヤーも楽しかったです。

国思い導師は涙を流されて拍手響きて結ばる玉の緒

充実した三泊四日だった

(神奈川県立麻生高等学校 原川猛雄 62歳)

雄大な阿蘇の山々に抱かれた最高の環境で、本当に充実した三泊四日を過ごすことができました。班の皆さんが厳しい日程にも拘らず、はじめに講義や班別討論に取り組んでくれたことに心から感謝してゐます。今後日常の生活に戻っても、合宿で学んだことを思ひだしてさらに精進されることを念じてゐます。

講師の方々の熱意あふれた講義には大変心動かされました。日本広しと言へどもこれだけ国を愛する思ひの籠もった講義が聴ける場は他にはないと思ひます。それと共に、今の時代に人を集め、合宿を継続する困難さを思はざるを得ません。しかし、私達の力を合せて取り組んで行けば必ず道は開けると信じます。

古川広治運営委員長・小林国平指揮班長をはじめ運営にあられた方々の印象は実に爽やかですばらしいものでした。お世話になりました。

草千里浜にて

友どちと語ひ登る丘の上両手を広げて強き風受けぬ

見渡せばカルデラ広がり遙かなる昔の噴火の跡の俣はゆ
間近にて見て驚きし大きな馬おとなしく並びてゐたり
ゆつたりと馬の背に揺られ友どちは楽しげに見えて手を振りたまふ

歴史を貫く玉の緒に感動

(駒交通事故総合分析センター 小田村初男 60歳)

四十一年前、大学二年生の時に参加した阿蘇合宿を想ひ出し、雄大な阿蘇の地での合宿に胸が躍る思ひでした。当時の合宿記録を読みながら阿蘇に向ひました。木下道雄先生の昭和天皇についてのお話は、今でも強く印象に残つてゐる感動的なお話でした。当時とは国内外の情勢も変り、参加者も少ないと聞いてをりましたので、若い人達がどんな思ひで参加してゐるのか心配な面もありましたが、実際に参加して、女子社会人班の班付きとして、若い人達がしつかりとした考へを持ち、自分の感想を的確にはつきりと述べてゐるのを聞き感心しました。

講義は、日本の歴史の繋がりと皇室の大切さで一貫してをり、それぞれにすばらしく、改めて勉強させられました。

小柳左門先生の講義で紹介された「天皇さまが泣いてござつた」の文章は、班別研修で輪読した際、班長・班付きの熟年者が感動の余り皆泣いてしまひました。

古ゆ國を貫く玉の緒に老も若きも繋がりゆかむ

歴史の断絶の危機に立ち向はう

(元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄 66歳)

今年の合宿の一貫したテーマは、歴史の連続性であり、國武忠彦先生のご講義にもあつた小林秀雄の「過去は今の私の中にある」といふことである。

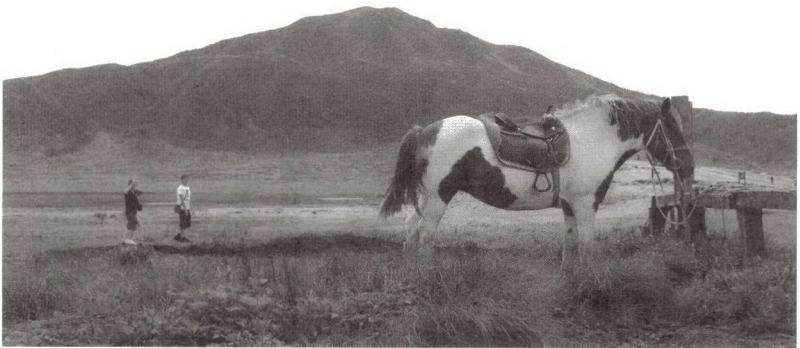
聖徳太子、大化の改新、万葉、元寇など、歴史を貫く天皇のご存在と、その時々々の国民の働きがあつての今の日本である。その日本が断絶・解体の危機にある中で、自分のできることは何か、改めて考へ、生き方を正さなければと痛感した。

中西輝政先生のご講義

日の本の国柄尊び国難に立ち向ふ人出でよと師はのたまひぬ

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午前、国民文化研究会会員の岸本 弘氏（元富山県立富山工業高等学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただししい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の庭本秀一郎氏（東洋紡績株）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち） 合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

歩いて阿蘇山に登る
（株）寺子屋モデル 横畑雄基

「徒歩により登らう」と言ふ学生の若さに負けじと我も進まん

「横畑さん軽快ですね」と言ふ友の言葉うれしくがぜんはりきる

のぼりきて火口のぞけば美しきエメラルド色に引き込まれけり

埼玉大学 教養 二年 山中利郎
 阿蘇山に登りながら立つ煙を見て

流れ行く阿蘇の煙を仰ぎ見て早や火口へと心わき立つ

九州工業大学 院 二年 鷲頭祥平
 阿蘇山火口登山にて

火口より絶えず煙は立ち上り見上ぐる空に広がりがりて行く

同志社大学 法 三年 佐々木 保
 中西輝政先生講話を受けて

さまざまの事を乗り切り力あるスピリットをば我は持たしたし

中村学園大学 流通科学 三年 相良真史
 阿蘇山の道登りつつ想ふかな大志を胸に生きてゆかんと

久留米工業大学 機械システム 一年 黒田 光
 合宿で学びし事が多くあり知らざりしことこそよかりきと思ふ

日本ユニシス（株）北海道支店 大町憲朗
 晴れわたる大阿蘇の嶺ながめつつ友らと語り登るうれしさ

さはやかな風吹きわたり心地よく友らと歩み登りゆくなり

緑なすみ山の姿ありがたく心すがしくあかず眺むる

第二班

琉球大学 理 四年 新里 道

果てしなく広がる海と砂浜は絵にも写せず言葉にもなせず

岡山理科大学 理 一年 妹尾亮汰
 高校の恩師、宝辺矢太郎先生を思ひて

志持つ友だちと学びつつ師の導きをありがた

く思ふ

九州工業大学 院 一年 伊藤健司
 日の本の未来を想ひ過去を知り松陰の念ひに我も応へむ

東京大学 教養 二年 高木 悠
 草千里散策

丘覆ひ茂る草むらなびかせて吹きゆく風の心地よきかな

満面に笑みを浮かべて友どちの語る言葉は盡くることなし

福岡大学 経済 三年 岡松侑希
 中岳の重なる地層に悠久の時の流れのすごさ

を感じず
 東京理科大学 理 四年 甘楽泰久

中西輝政先生の御講義を拝聴して
 中国の脅威を学び湧き上がるみ国を守らむ強

き思ひの
 日本青年協議会 松岡篤志

中西輝政先生の御講義を拝聴して
 対馬から佐世保九州沖繩を侵さむとする仇を許さじ

三万の工作員のはびこりてむしばまれゆく刻

一刻と

御国今安政五年の如くなりとただならぬ危機を師は語ります

心と知略共にそなふる新しき日本人出でよとあつく語らる

熊本市役所 折田豊生

阿蘇火山口登山

大地の底なる力俵ばせて中岳火山口は不気味なるかな

切り立てる火山口の底の湯溜りの淡き緑の色鮮けし

とり囲む火山口の壁は幾重にも地層しるけく重なりてあり

友皆と阿蘇の山々眺めつつ語りひゆけば心放たる

第三班

インターナショナルリスクリミテッド 伊藤俊介

中岳火山口展望台にて

見下ろせばガスの切れ間に垣間見ゆる翡翠色なる火山口の水

中岳の火山口底より荒々しくそそり立ちたる赤き岸壁

九州工業大学 情報工 三年 権藤尚樹

草千里にて小丘を登りし折りに

登山とは名ばかりなれど一歩ずつ踏みしめゆけば心踊りぬ

友どちと共に登りし頂の吹きぬくる風肌に涼しき

福岡大学 工 二年 廣木文屋

班友の皆でおにぎり頬ばれば味も景色も一際うまし

草千里にて

友どちと共に目指して登りたる丘の上には風吹きぬくる

丘越えて間近に見上ぐる鳥帽子岳姿堂々鎮りてみゆ

福岡工業大学 工 一年 井手崇富

阿蘇で食べしトウモロコシは新鮮でソフトクリームこれまた最高

東海大学 農 二年 寺井祥一

火山を覆ふ草原輝きてその草を食む牛馬も生きたり

榊寺子屋モデル 山口秀範

照りつくる陽射し隈なく注げども高原渡る風心地良し

東屋の僅かの陰を求めゆき弁当開けぬ友らと共に

久々に見えて昔語りなどしつづつ頬ばる握り飯

うまし 幾度もこの地に集ひみ教へを賜びにし事共蘇り来る

千里原見放る緑目にしみて一陣の風に生命恵まる

（二回目の作品）

学生班の余興内容低俗化により暫く中止されをりし「夜の集ひ」運営委員会の総意により復活す

委員らの執念実りて五年ぶり「夜の集ひ」は今幕を開く

講義内容踏まへし出しもの統出し一抹の危惧いつか吹き飛ぶ

火吹きしつづ集ひ盛り上げ進めゆく若き委員ら姿澆刺

大阿蘇の宴 酣皆立ちて「進めこの道」声高らかに

今は亡きあまた師友と幾度も力を込めて歌ひしこの歌

高原の月影今宵十三夜宴の余韻に酔ひつづ眺む

福岡県立筑紫丘高等学校 総括教頭 小林 至

草千里にて

学生と共に語りひ登りたる丘の上にはすがし

き風ふく

第四班

日本青年協議会 外村聖典

阿蘇の火口

緑なす山はしだいに赤黒き岩肌の多くあらはれにけり
赤黒く染まりし火口は古ゆたえず動きし火山のしるしか

学習院大学 法 四年 藤尾允泰

中西輝政先生のご講義を拜聴して

黒船に乗りこむがごとく国護る青年たれと師は宣ひぬ
国を想ひ身をかへりみず生涯を捧げし松蔭に心奮ひぬ

杏林大学 二年 大淵将之

朝露に湿る草原牛も見え阿蘇の朝の爽やかなるかな

立命館大学 三年 吉富孝明

中西輝政先生の御講義を拜聴して
常ならば会へぬお方に質問し咽喉は詰りて声は震へる

九州工業大学 情報工 三年 藤瀬拓臣
草千里の喫煙場にて

風吹けばたばこの煙は消えうせど雲は消えずに不思議と滞る

福岡大学 法 四年 中尾修宇弥

樹木すら育たぬ山の岩肌に石を積み上げし想ひを忍ぶ

(株)ラック 高橋俊太郎

合宿地への往路の飛行機にて

熊本の山々見えて合宿地にいよいよせまると胸おどりけり

興銀リース(株) 小柳志乃夫

志賀建一郎先輩のご講義をお聴きして

壇上に仁王立ちして声太く眼光強く語りたまひし

鎌倉の武士かくやありけむと思ひつつ仰ぐ雄々しき姿を

第五班

福岡大学 経済 三年 植木秀代

中岳登山にて

班員と力を合せ頂に立てば吹く風心地良きかな

阿蘇火口を見て

大地から湧き上がりたるエメラルドグリーン(緑青) 生きたる火山の神秘に触れけり

中央大学 文 一年 廣木摩理勢
つい昨日出会へる友と登りしは阿蘇の中岳つを深めき

下関国際高等学校 秋田崇文

阿蘇中岳の火口まで登山せし折に

御友らと火口目指して歩みゆく途上の風の心地良きかな

九州工業大学 情報工 三年 大森淳史

小野吉宣先生の久保田真さんへの提案を聞きて

学生の思ひ出深き体験をと勧め給へる御思ひ嬉し

火口への道のりを議論せし折り

パスの中笑ひながらも話し合ひ間も空かぬうち歩むに決りぬ

國學院大學 文 三年 相澤守

阿蘇火口登山

登山道何処と探す班の皆我も探せど道みつからず

友どちの「道があつた」と声がして皆と一緒

に我も駆け寄る
山道を語らひながら友どちと火口目指して歩むは楽し

火口の底のぞきてみれば美しきひすいの色に染まれる湖あり

福岡県立直方高等学校 小野吉宣

開会式の折に

凜として壇上に立ち伊藤君(九工大)開会宣し
今し始まる

専修大学 一年 奈良崎恵祐

青々と夏草茂る阿蘇山を仰ぎ見をれば心洗は
る

(株)アルバック 北浜 道

中岳火口散策の帰路、班員の軽石を拾ふ
を見て我もと

火口への道の歩みを共にせしかたみの品と石
を求めぬ

細かなるあまたの穴の吹き出せる小ぶりの黒
き軽石ぞこれ

いくにちか共に過せし友どちと得しつながら
の記念にぞせむ

第十一班

九州女子大学 家政 三年 松浦成美

阿蘇山火口を見て

たちこめし白き煙の消えゆきてエメラルドグ
リーンの水面現はる

班別研修

お互ひに友の意見を聞きをれば感動さらに深

まりてゆく

北海道大学 水産 四年 河田麻帆

阿蘇火口に

岩肌に太古の噴火を想像し大地の力をおそれ
うやまふ

九州女子大学 人間科学 四年 西山志織

初めての班別研修の折に

小田村先生の「心をこめて」の一言をいかな
る意味かと皆で考ふ

研修を終ふれど思ひを述べあへる仲となれる
を嬉しく思ほゆ

中村学園大学 人間発達 二年 古川麻衣

何事のあるやと歩けば突然に視界に火口のと
びこみ声あぐ

九州大学 農 二年 竹中千裕

縁ありて出会ひし友と歌を詠み言葉を探すひ
ととき嬉し

亜細亜大学 三年 三輪夏美

風ふきてけむり消えゆき火の口に現れたるは
エメラルドグリーン

都留文科大 文 一年 神保江里子

大阿蘇の火口に立ちて受ける風からだを吹き
ぬけ心地よきかな

山口県立熊毛南高等学校 宝辺矢太郎

合宿二日朝

朝つゆにぬれたるくさはらきらめきて朝のす
がしささらにいやす

朝の気はすがし胸一杯吸ひこめば根子岳高岳
まなかひに迫る

高岳に朝日影い射し山はだにかげ濃く残す姿
ををしも

いただきをやや覆ひたるうす雲の流れてやが
て山の端に消ゆ

くさはらのなだれに群れる牛たちの草食む姿
うごくともなし

(二回目の作品)

山口秀範さんの御講義をさく

英雄は英雄を知るか左内との半面なきを嘆ず
松陰は

第十二班

元富山県立富山工業高等学校 岸本 弘

短歌導入講義

今は亡き師の御心を仰ぎつつ講義準備に明け
暮れし日々

あのこともこのことをと思ひつつ過ぎゆく
時に追はれ語りゆく

慕ひ来しお二人のお歌を結びとて拙き講義今
了りたり

(二回目)の作品

全体の記念写真をいただきて

目にしるく山なみ迫る草原に我らの姿とどめ
てありき

折々にこの写真を取り出し我が行く道の励み
となさむ

奇しきかもまた七人の乙女らの一人ひとり
胸にとどめむ

日本青年協議会 三荻 祥
志賀建一郎先生のご講義を拝聴して

元寇にただ五騎なれども向かひ給ふ武士ども
の勇ましきを知る

朝札にて

朝の陽を受けし草原のをちこちに虫の鳴く音
目を閉ちて聴く

筑紫女学園大学 文 四年 井崎恵美
火口にむかふパスより阿蘇山を臨みて

じゅうたんを敷きたるごとく柔らかにそよぐ
小草に心和みぬ

九州女子大学 小野香美
導入講義

言の葉を本音で交し合ふことは人と人との心
つなぎぬ

阿蘇の地に吹きくる風のさはやかに肌にあた
るは心地よきかな

佐賀大学 文化教育 三年 吉本朋代

溶岩の流れし後にも生えて来し草の命の力を
感ず

中村学園大学 人間発達 二年 久富玲奈
頂上でロープウェイを降りて

降り立ちてそよふく風に運ばるるかすかに香
る硫黄のかほり

長崎大学 教育 一年 浜崎 愛
煙立つ底よりそびゆるむきだしの岩はだ荒く
どしりとこまへる

中央大学 総合政策 三年 大小田紗和子
草千里あたり一面見渡せばどこまでも続く阿
蘇のやまやま

草千里にて

第二十一班

羽後信用金庫石脇支店 須田清文
一面に広がる草原ながむればこちよき風吹
きわたるかな

学生の時に出会ひしをちこちの友らと語らふ
時の楽しき

三十年前会ひし友らとまた会ひて語らふ楽し
さたぐひなきかな

それぞれの地に励みをするみ友らの語る言葉
を

きくぞうれしき

(株)ハウインターナショナル 祝原正典
広大な阿蘇の山々眺むれば聞きしに勝りてま
なこ開かる

丘の上ゆ見し人影の小さければ我らもさぞや
小さくうつらむ

広大な阿蘇の大地に比ぶれば小さき我が身と
思はるるかな

アサヒ飲料(株) 澤部和道
若かりし父も阿蘇にて合宿に参加せしこと歌
読みて知る

やはらかな緑広がる草千里清々しき風丘に吹
きくる

ジツト(株) 鷹野竜一
阿蘇の山の火口ゆはるか見下ろせば色鮮けし
水面の緑は

大阿蘇の緑の大地の連なるをながむる我的心
安らぐ

(株)九州リースサービス 近藤正和
頂で青き御空を仰ぎ見れば自づと心も晴れ渡
りけり

草原に語らふ親子の姿見れば在りし日の母思
ひ出されり

(株)タリン・マツト長崎支店 川原大介
雄大な阿蘇の火口に立ちたれば火の国の名を

思ひ出すなり

光成英正

一面に緑のもゆる草千里に我とけこみて心や
すらぐ

(俳)根本山宝満堂 山下和彦

大阿蘇のつらなる山々ながむれば人生苦楽に
思ひいたれり

(俳)ワイドレジャー 澤島 尚

青空に映ゆる山並深緑の色鮮やかにして雄大
なりき

第二十二班

若築建設(株)九州支店 池松伸典

草千里にて

時折に涼しき風の吹き過ぎて汗ばむ膚にここ
ちよきかな

草の上に寝そべり友らと語らへば心満たされ
時の過ぎゆく

すずかけ台保育園 平野正憲

草千里に戯れて諸氏の説を聞く

大阿蘇の煙をながめし草千里友と語らふ学び
のひと時

内田喜章

阿蘇の朝

夏草をふみてのほれば草原に朝日のさしてこ
ころあらたなり

國學院大學特別研究生 大岡 弘

志賀建一郎先生の御講義をお聴きしなが
ら来年を想ふ

尖閣の島々危し来む年は異国の船団上陸すて
ふ

草千里にて小高き丘に登る

いただきに登れば視界広がりて風の吹き来て
ここちよきかな

(俳)福岡県中小企業経営者協会 林 賢吾

合宿に参加して

聞くことの刺激に勝る語らひは思ひがけず
楽しかりけり

航空自衛隊 村山健司

中西輝政先生の御講義を聞きて
将来の日の本想ふ先生の熱き言葉に心昂る

日商保険コンサルティング(株) 橋本安太郎

青空を見上げて草に寝ころべば心は天に浮か
ぶ雲かな

悠久の永きに渡り在る大地隣に君がいたなら
いいな

福岡大学経済学部教授 阿比留正弘

草千里どっしり座って飯を食み語らふ友の楽
しげに見ゆ

さまざまれ書房 大内保治

朝の集ひに参加して詠めり
清々し阿蘇の山々われみつめおのが心を洗ひ
清めり

久しぶり会ひにし大兄は大らかに阿蘇の山々
懐深き

清々し阿蘇の山々みつむればおのが心も清め
られけり

宮崎県立都農高等学校 校長 竹下鉄郎

草千里にて
なだらかな丘の斜面に青々と夏草繁りて涼風
の吹く

空は澄み真近に山は迫り来て牛はのどけく草
喰みてをり

第二十三班

(俳)IHIEエアロスペース 内海勝彦

「朝の集ひ」にてしばし目を閉ぢるやう
に言はれて

まぶた閉ぢ耳を澄ませば思はずも鳥の鳴く声
間近に聞こゆ

蟬の声虫の鳴く音も加はりて小さきいのちの
営み偲ばる

さまざまの生き物たちを育ててはるかに拡ご

る阿蘇の緑は

中岳火口にて

大森和弘

火口より覗けば煙の間よりみどりの水面垣間
見えけり

班別研修にて

いきいきと語れる若き友どちの姿を見れば頼
しきかな

(株)ジットセレモニー 木本正彦

火口よりわき出づる煙前にして熱き決意を胸
に抱きぬ

(株)福岡県中小企業経営者協会 神代真宏

中岳の火口の煙搔き消えて翠の水辺鮮やかに
見ゆ

(株)根本山宝満堂 平川秀隆

真剣に国のゆくへを語り合ふ友との出会ひは
ありがたきかな

(株)ワイドレジャー 林 和宏

草千里にて

雄大な大草原を見てをれば幼き頃の思ひ出さ
るる

はらからと時を忘れて虫を追ひ川遊びせし昔
なつかし

S I S (株) 内田厳彦

草千里班の友らと車座になりて語らふ昼餉楽

しも

師や友の数多集ひて賑はしき阿蘇の合宿を思
ひ起しぬ

朗々と古典読み行く友の声「歴史を生きる」
言葉のままに

鳥栖市役所 西山八郎

阿蘇中岳火口にて
見おろせば切りたつ火口の岩肌に断層しるく
刻まれてあり

火口おほふガスのいつしか消えうせてエメラ
ルド色の湖面あらはる

(株)はせがわ 長谷川裕一

草千里にて
先人の語り伝へし国がらを腰を下ろして集ひ
語らふ

語らふ

第二十四班

山口県立熊毛南高等学校 吉津佑紀

連日の酷暑さなかの大阿蘇の高原の風心地よ
きかな

(株)テノ・コーポレーション 吉武篤志

合宿二日目の朝に

草原に餌を食む牛のどかなり朝もやかかる高
岳を背に

(株)福岡県中小企業経営者協会 染矢研司

疲れたる体を癒やす風を受けて草千里の道を我
は歩みぬ

(株)九州リースサービス 是永育洋
いつの日か家族と来たし草千里に我娘も喜び
駆け回るらむ

日本和装ホールディングス(株) 早瀬賢治

日常の喧騒離れ阿蘇に来て自然の涼風に心洗
はる

第五十五回合宿教室に参加せし折に

阿蘇の野に二日目も過ぎ研修会に参加の喜び
日毎に増せり

古澤万亀生 武藤愛高

大声で歌ふ君が代に驚きて思はず吾は背すじ
正しぬ

今までは口は開けども声小さく周りに合はせ
歌ひてゐたり

朝の集ひの君が代流れ口開き腹の底から我は
歌ひぬ

損害保険料率算出機構 鏡 信弘

師を偲ぶ
導きをいただきまつりし数多なる師の君一人
もいまさず寂し

「知解」「体解」「心解」のみ教へ受けつぎて

友は心をこめて語りぬ（藤新成信大兄）

我もまた身につつきしこと少なきも師のみ思ひを受けつぎゆかむ

紅塗りの文箱を友の孫様に送られし歌暖かきかな（宝辺正久先生）

歌文に心通はせたまひますゆかしき生き様学びゆきたし

合宿二日目の朝に
東急建設(株) 奥富修一

草原の朝露踏み阿蘇岳に霧満ちるさまをしばし眺めぬ

登山にて
碧色の水面の見えて中岳の火口は今も噴煙を上ぐ

（二回目）の作品

都留文科大学の神保江里子兄の意見発表を聞きて

けなげにも父君の言葉を中心にかけ合宿日程を過ぎし来つるか

大切なことは優しく語るべきと父君思ひつつ君は気づきぬ

壇上に切々と語る言の葉の全てを父君に聴かせてあげたき

第二十五班

(株)ワイドレジャー 池尻弘貴

ただならぬ国の有り様我は知り友らと共に励みゆきたし

福岡教育連盟 副島賢三
阿蘇に向ふ豊肥線車中にて

渓谷を過ぐれば棚田見えきたる変る景色を飽かずながむる

日本郵便大村支店郵便課 橋本公明
笑み浮かべ言葉かけくる友ありて三十年ぶりぞ会へて嬉しき

福島義榮

大八洲創生思ふ阿蘇の山大カルデラの起こり聞きつつ

(株)はせがわ 藤田 哲
生業をしばし離れて来たけれど仕事のことどもやはり気になる

登り来て風のさやかに吹き渡り我が身に染みて心地良きかな

柏原商事(株) 兼深貴史
(株)まるぶん 嵐 隆将

広ごれる阿蘇の山々見渡せばふる里の山も思ひ出さるる

灼熱の太陽照らすこの地にて涼しきふる里思ひ出さるる

ひ出されり

拓殖大学・亜細亜大学講師 山内健生
中西輝政先生の御講義

目に見えぬ人の心のありやうに濫れの出で来しとまづ説きたまふ

老いし親の行く方も尋ねず年金を掠めるとは許しがたしも

親と子の絆さへもが崩れ行くか御講義聞きつつあらためて思ふ

日の本の心を持ちて戦略を練るべきが大事のみ言葉つよしも

第二十六班

澤部壽孫

二十一日、朝の集ひ
澄み渡る朝の空に阿蘇の山緑豊かに雄々しく立てり

高岳をおほふむら雲たちまちに風に払はれ薄れ消えゆく

目を閉ちて耳をすませばをちこちゆ小鳥囀る声の聞ゆる

岸本弘先生のご講義を聞きて

我が歌を友の語れば若き日の大村合宿の日はよみがへる

四十八年既に経れども師の君と友らとの日々我忘れぬや

師の君の逝きましてはや十一年夢の如くに歳月は過ぐ

夜久先生山田先生いや次ぎてみまかりませばいよよ寂しも

至らざる我にあれども大人たちのみあと慕ひて生きつらぬかむ

(二回目の作品)

友みなの方協せて大阿蘇の合宿教室無事に終りぬ

若きらの壇上に立ちうちつけに思ひ語れば涙ぐましも

亡き大人を慕ひ来ませし老い人と阿蘇合宿に会ふは嬉しき

御子一人亡くせしといふ友の歌よめば悲しく胸つまり来る

亡き御子の駆けし姿偲びつつ草千里に立つ友のかなしき

久々に友らと会ひてひととせを生くる力のみなざるおぼゆ

東洋紡績(株)財務部 庭本秀一郎

藤新城信先生の御講義を拝聴して

自らの進路を決むる時まさに生くるが真の学問なりとふ

事にあたり惑はぬ心の強さをば学問を通じ身につけゆかむ

草千里にて

青々と広ぐる阿蘇の草原に我が子連れ来て共に駆けたし

さはやかな風渡りゆく阿蘇の野に遊びたしと思ふ我妹とともに

その後折田豊生さんにお会ひして

「真珠子姫を連れて来にやあいかんね」と先輩は宜りたり見透かすがごと

中西輝政先生の御講義を拝聴して

我が国の衰亡のさま詳らかに痛恨の思ひに語るる師は

自らにできうることは何かとて自問をしつつ御講義を聞く

思ひ起こせば我がなりはひも外国とかかはらざれば成り立たぬなり

中西輝政先生が今後の日本にとつて国際金融を学ぶことが大切と仰るのを聞きて

会社にて財務に従事してをれば国際金融ともかかはりあらむ

国越ゆる再編買収の波寄することもあらむと思はるるなり

我が国の我が社の社風と技術をば守り育む財務をなさん

(株)新明電材 飯島隆史

朝日さす阿蘇の国原雲海のはるか東に音なく流る

朝露にぬるる草原を友どちと歩めば渡る風すがすがし

中島法律事務所 中島繁樹

をちこちゆ小鳥の声に虫の音もかさなり聞ゆ阿蘇の広野に

夏日射す空のかなたに中岳は岩肌しるくそそり立つなり

(二回目の作品)

慰霊祭にて

大阿蘇の夜のしじまに御製読む言の葉しるくひびき渡れり

陸上自衛隊 森 浩典

もうもうと白き煙の立ちこめて活くる火山は雄雄しかりけり

さはやかな風吹きわたる山道を下る足並み軽きことかな

日章工業(株) 藤新城信

導入講義の御役をいただきて

合宿に何語らむと迷ひつつこのひと年は過ぎにけるかな

思はざりし今は亡き師のみ姿の胸にうかびく壇上たてば

ありし日の師を思ひつつ我が胸の思ひのたけ
を語り終へけり

(二回目作品)

導入講義の折詠める

みちのくゆ送りたまひしリンゴジュースを押
しいただきて壇上に立つ

師の君の心づくしのはげましを受けてのぞみ
ぬ導入講義に

折尾愛真短期大学 松田 隆

国文研阿蘇合宿の集合写真撮影場所にて
職場にて共に勤めし先輩に肩をたたかれ我は
驚く

(二回目作品)

国文研夏合宿「夜の集ひ」で「進めこの
みち」を歌ひつつ

このみちをたたかひ進めと歌ひつつ涙あふれ
て我は歌へず

「夜の集ひ」の準備中に他の合宿グルー
プの活動を見て

歌ひつつ歩み進める子らに照る月の光に幸せ
祈らむ

慰霊祭にて

英霊の御霊祭りの斎庭にて見上げし空に月輝
けり

全体感想自由発表にて

日の丸を背にして話す若人の素直な言葉に涙
流せり

九州大学名誉教授 清水昭比古

会場に向ふ立野の邊りにて

むくつけき風車の群れの無かりせば阿蘇のみ
山はくすしきものを

元福岡県立小郡高等学校 校長 志賀建一郎
草千里にて

緑濃き草千里の原眺めつつたずみをれば風
渡り来ぬ

草千里を見れば思はる二十年はたじせみ前三人の吾子を
連れて来たるを

雪積もる千里の原を駆けまはりし子一人失ひ
ぬ悲しきろかも

日本への回帰(45集)に寄せて

日の本に生まれるながら日の本に回帰ると言
ふはひたに悲しき

日の本に回帰るはたての若者の猛き姿を思ひ
描きぬ

飯塚市立鎮西中学校 大津健志
中西輝政先生のご講義を聞きし折に
我が国に起りしことを今すぐに生徒に伝へ共
に学ばむ

(株)ハウインターナショナル 多賀祐之介
自らの行ふべきは何事か考ふべきとあらたに

気付く

第三十一班

神奈川県立麻生高等学校 原川猛雄

はるばると六年ぶりに訪ね来し阿蘇の山々鎮
まりて見ゆ

さはやかな風わたりきて心地良く草の香薫る
阿蘇の高原

(勸交通事故総合分析センター 小田村初男
阿蘇合宿への機中にて

若き日に友らと集ひ学びにし阿蘇カルデラに
今向ひをり

かの時はゲバ棒持ちし輩らに学びの園は荒ら
されてをり

各地より友ら友らの集ひ来て師のみ言葉に聞
き入りにけり

阿蘇の地に今年集へる若人ら持てる心は同じ
なるらむ

すずかけ台保育園 有馬夢乃
草原の涼しき風受け友達と語らひ合ひて小山
を下る

草原の風は意外に強かりき追はるるが如く小
山を下る

すずかけ台保育園 田中美里

草千里

友と食べしソフクリームあのうまさもう
一度きて食べてみたいな

ふきわたる阿蘇の風うけ友どちと食みしソフ
トの味のうまさよ

(宗)根本山宝満堂 木ノ内美紀

頂ゆ裾野の町まで緑なる生命しるけき阿蘇は
うつくし

鶴花園 鶴 比呂子

草千里にて

山肌を巡りめぐりて吹く風は命あるものすべ
て包めり

(株)はせがわ 小山奈都子

朝の阿蘇野にて

目を閉ちて耳を澄ませば鳥の声虫の声して心
洗はる

阿蘇の野の高みに登りて見しものは古き大地
のなせる跡かな

馬の背にのぼりて見えし青空はいつもより少
し近く思はる

元小田原市立矢作小学校 校長 岩越豊雄

岬々としてきり立つ根子岳よく見れば円空仏
のみ顔ににたり

釈迦牟尼の寝姿に似たる阿蘇の山朝のみに空に
さはやかに立つ

目をとちて耳をすませば遠くより小鳥のさへ
づり聞え来るなり

国民文化研究会

理事長 上村和男

中西輝政先生ご夫婦を熊本空港に出席へ
る

奥様とつれだち給ふ師の君のさやけきみ姿見
るがうれしき

かけ寄りにて声をかくればたちまちにゑみのあ
ふれてなつかしきかな

(二回目の作品)

名和長泰兄「合宿教室」開催地(阿蘇)

を突然訪ね来る

忙しきなりはひの中訪ね来し友のなさけの有
難きかな

くさぐさを語りし中に今は亡き師の君偲ぶ言
葉なつかし

元・講談社 磯貝保博

阿蘇登山

青空に浮ぶむら雲動かずも心地よき風広原わ
たる

火口より湧きあがりたる噴煙のたなびく姿生
けるがごとし

慈悲深き仏のごとくおはします阿蘇の五岳に
心しづまる

(株)石村萬盛堂 石村僭悟

講堂の窓ゆ根子岳を真近に眺望し詠める
師の君の愛で給ひたる根子岳の変らぬ姿そび
え立つ見ゆ

英雄しくも又奇怪なる山容を師は墨のみで描
き給ひぬ

師とともにこの地に来たり水墨画の手ほどき
受けし夏の日懐し

福岡中央公共職業安定所 古川広治

家を発つ前に
準備不足にドキドキしつつ精一杯やってきま
すとメールを送る

ドキドキのままにて行けとふ先輩からのメー
ル届きて力得にけり

ISMグループ 最知浩一

朝の集ひにて
さみどりにかがやく阿蘇の山々を集ひの庭ゆ
はるかに眺むる

朝つゆにぬれし草々踏みしめて朝のつどひを
行はむとす

(二回目の作品)

慰霊祭の準備をせし折
高岳を見上ぐる阿蘇の草原くさばに友らとともにゆ

庭つくらむ

夕ぐれの阿蘇の山々ながめつつみ祖のみたま
迎へむとする

草原にすずしきそよ風ふきぬけて汗ばむ肌に
心地よきかな

熊本県立天津高等学校 校長 白濱 裕
朝のつどひの折に

涼風の吹き渡りたる草原に友らと仰ぐ五岳し
るけし

眼閉ぢ耳を澄ませば聞こえ来るかさけき虫の
音秋近みかも

(株)寺子屋モデル 廣木 寧
志賀建一郎先輩の元寇の文永の役につい

てのお話を聴きて
わが国の遠つ御祖のいさをしを調べし論文は
今書かれたり(佐藤鉄太郎氏の論文)

先輩は文永の役に戦ひし遠つ御祖のいさをし
を説く

(二回目の作品)

三十あまり七年前に参加せる合宿教室に吾子
たちと来る

吾子二人わが学び来し合宿に歴史のいのち学
び励めや

(株)ハウインターナショナル 谷口耕平
敷島を守り来られし先達の繋げる歴史を生き

るはうれし

(二回目の作品)
全体感想発表にて

つぎつぎに壇に登りて参加者は素直な心をさ
まざま語りぬ
合宿に来てよかつたとふ発表を聞けばただた
だうれしかりけり

祐誠高等学校 小林国平
教へ子の初参加

この一年準備進めし合宿に教へ子三人来たる
がうれし

吉富孝明君へ
先生に質問したる緊張と喜び語る君にありけ
る

井手崇富君へ
分からずとも感ずることを心掛け何かを得た
る喜びつかめ

黒田 光君へ
初めての学びにとまどふ君なれど講義に臨む
目に力見ゆ

(株)ハウインターナショナル 桑木康宏
草千里にて

パラソルの下で日をよけおぼちゃんが夫と祖
母ともろこしを売る

七輪に炭をつぎたし網のせて軍手をはめても

ろこしを焼く
日と風にさらされ焼けしおぼちゃん笑顔は
道ゆく人の足止む

熊本県立熊本高等学校 久保田 真
古川広治運営委員長の苦勞をしのびて
「何事も断りません」と大任を引き受けしよ
り一年のたつ
かくせむと意欲に満つる若きらのあまた集ひ
て準備進め来
若きらの思ひを活かす日程にと会議を重ねて
努めし君はも
苦勞重ね作り上げたるこの集ひを迎へる君の
心いかにか

(二回目の作品)
十九日に合宿地に入る

いつになく猛暑の続くこの夏の阿蘇の日ざし
も強く照りつく

四泊五日を終へて
合宿を終へて窓より吹き込める風はさやけし
秋の気配か

北九州市立医療センター 森田仁士
夕ぐれて根子岳の上さやかなる月は輝き山の
端照らす

寝仏の御顔に見ゆる根子岳の厳しくそびえ鎮
もりてあり

元・キユービー株 山本伸治

七年ななとしの時の隔ても気にならず阿蘇の地に立ち
なつかしさ覚ゆ

空清く風さはやかなる草千里に集ひし友とよ
ろこび共にす

(二回目の作品)

ファイヤーのあかりに照され集ひたる若人の
顔かがやいて見ゆ

楽しげな人の輪あまたあちこちに出て来てに
ぎはひいやましにけり

国立病院機構都城病院 院長 小柳左門
阿蘇の朝

かなかなの声ははるかに聞えきて阿蘇国原に
朝はあけゆく

見はるかす遠山の空うす朱くそめて美し阿蘇
の夜明けは

草をふみて丘にのぼれば緑こき阿蘇山なみの
姿すがしも

高岳は目にせまりきておほいなる阿蘇山並に
朝の日はさす

目をとちて聞けば聞ゆるをちかたに美しく鳴
く朝鳥の声

熊本市役所 濱口知久

レクレーション引率の役目を終へて

阿蘇山を紹介したく備へせしに伝へたき事な

かばも言へず

引率の役目に頭を満たされて自己紹介をする
を忘るる

(二回目の作品)

ありがたうございましたと友の言葉日々の疲
れもさはやかに消ゆ

見学者

久留米大学附設高等学校 名和長泰

みどり濃き大阿蘇の地に師の君と出会ひし時
は三十年前

国柄をただ守らむと一すぢの信つらぬきし師
の君なりし

うるはしきまことの道を求めつつ教へたまひ
し師の君なりし

(株)石村萬盛堂 山田紀代美

初参加あれこれ迷ひあるけれど多くの方に励
まされつつ

火の国の山路を車で駆けゆけば昨晩までの不
安消えゆく

熊本市立湖東中学校 山方富美子

濃き淡き鮮やかな緑しきつめて阿蘇の山々ひ
らけゆくかな

アルバイト

熊本高校 木下美優

山頂で吹き起こる風どこへやら笑声と共に瞬
時に去りぬ

熊本高校 日野由佳子

大草原ほのかに光る朝もやは幻想的なミルク
の海かな

夏風が私のほほをなでていきもう一度みたい
ひまはりの花

福岡有朋高等専修学校 小川夏穂

初めてのアルバイトにて合宿に参加したりて
友の出来ぬ

草千里で新たな友と写真とる今年の夏の善き
思ひ出に

仕事終へ帰りし部屋でリンリンと鳴く虫の音
に秋を感じぬ

合宿地に寄せられた歌

青森 長内俊平

合宿御参加の皆様へ

青砥宏一大兄との最後の合宿つれづれとなりたりし阿
蘇へと急ぐらむみ友らをおもふ(昭和六十年

第三十回合宿)

胃癌の手術終りて間なき身をおして馳せ呉れ

給ひしわが友を憶ふ

二夜のみの睦みなりしが朝夕を共にすぐせし
友を忘れず

今生の別れと友は予感せしや歸りて幾月も
なく逝き給ひけり（昭和六十一年一月廿八日
逝去）

○

わがこころ遠く阿蘇へと飛びゆきて友らと共に
語らふもころ

下関 宝辺正久

阿蘇の地を遥かに思ふ

阿蘇谷の朝風衝きて行く汽車に在りて奮ひし
われらなりけり

共に在りし阿蘇合宿の師も友もいまに笑みつ
つ在りませるかも

阿蘇岳を振り仰ぎつつ歌詠みし合宿を思ふ今
も然るらむ

東京 小田村四郎

山なみを見るかしつ大阿蘇に学び語らふ
友ら偲ばゆ

くだちゆく御世憂へつともろともにしばし学
びの道に励まむ

阿蘇の地に共に語りし友どちの教も少くなり
にけるかな

新しき友ら集ひてもろともに絆むすぶをはる

かに祈る

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過ごしでしょうか。熊本県「国立阿蘇青少年交流の家」で共に学び、語り合つた「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎました。このたびやうやくこの「感想文集」を皆様のお手許にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもつた文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時でした。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関

係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。

文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを通りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「短歌」について

合宿では二回にわたつて短歌を作りましたが、第一回目のものは班別相互批評をして添削され、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、感想文の執筆の折につくつていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しい生業の中で、御協力いただきました大日方学、坂本芳明、武田有朋、穴井宏明、高木雅史、濱崎史嘉、佐野宣志の各氏に心から御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン中尾

国博さんにお世話になりました。いろいろな方々のご協力によつて出来上つた「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

読み進むにつれて、「合宿教室」の三泊四日間の様々な感動が鮮明に甦つてくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長、班付の方々、班友に一筆便りを差し上げていただきたく、併せてお願ひ申し上げます。

(北浜 道記)

〔資料〕

第五十五回 “合宿教室（阿蘇）” 感想文集

非 売 品

平成二十二年十二月二十日発行

編集兼発行者

社団法人 国 民 文 化 研 究 会

理 事 長 上 村 和 男

編 集 長 北 浜 道

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇―〇〇一―

電 話 〇三―五四六八―六二三〇

F A X 〇三―五四六八―一四七〇

